

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

特集:ミステリーのまち



2001

特集

ミステリーのまち

目次

「地域おこし」は文化的アイデンティティの確立から	神崎宣武 民俗学者	4
北海道でよみがえった弁慶・義経 北海道寿都町・山川英俊		8
古文書をもとにキリストの墓でむら復活 青森県新郷村・角岸秀伸		10
日本一「天狗自負にむらおこし」 栃木県湯津上村・長谷川操		12
伝承・伝説をもとに UFO博物館 石川県羽咋市・高野誠鮮		14
古墳・龍神、桃太郎伝説ミュージカル 愛知県犬山市・中野金弘		16
「鬼太郎、目玉おやじ」に会える 鳥取県境港市・黒目友則		18
鬼とたたき製鉄を組み合わせ祭り 岡山県総社市・林正美		20
平家の子孫誇りに二大イベント 徳島県東祖谷山村・小林三喜代		28
恐竜化石で探究・学習するまち 熊本県御所浦町・森数安		30
21世紀・活力ある地域社会づくり 村田純一（財地城活性化センター会長）		3
●コラム		
自分の足で歩き、自分の頭で考えよう 渡辺弥栄司（ビューティフルエージング協会会長）		22
尚武の国ならではの地域づくり 黒田武一郎（熊本県知事）		27
●地方行政機関連動施設解説		
地域情報交流拠点施設整備モデル事業について 総務省自治行政局過疎対策室		32
創立五十周年と電力自由化 南山英雄（北海道電力株式会社取締役社長）		35
全国地域リーダー養成塾平成13年度開講式		36
住民参加による魅力ある公共施設づくり		38
●地域づくりの団体解説		
もったいない総研フォーラム 福岡県北九州市		40
●地域をいえる女性（ワ）		
グローバル文化交流協会 静岡県三島市		42
●トリック		
地域通貨「エンバサ」で商店街活性化事業 高知市・今城逸雄		44
センター通信		46
●トリック		
ミステリーのまち		1・23
都道府県漫遊／手前みそですが		47・48

表紙●チヨウクライロ舞
（秋田県象潟町）

六月九日、延年チヨウクライロ舞（花笠舞）など七番が金峰神社の二間四方の土舞台で演じられた。花笠舞は六人の男児が女装し、花笠をかぶり、チヨウクライロのはやしと笛に合わせて舞う。チヨ



ウクライロは、「長久生」と書き、長く久しく生きる姿の意味、即ち延年舞。

今から千二百年ほど前、鳥海山に手長足長という悪鬼が住み人びとを苦しめたので、文徳天皇の命を受けた慈覚大師が法力でこれを退治、このとき祭りで舞われたのがチヨウクライロ舞といわれる。

象潟は、「奥の細道」で芭蕉に、象潟や雨に西施が合飲の花と詠まれた地として有名。当時は九十九島、八十八潟があり、松島と並ぶ奥羽の二大景勝地であったが、その後の地震で陸地となった。西施は中国古代の代表的な美人。合飲の花は象潟の町の花。

●ペンII丘●カメラII小形又男

現代においても、すべての現象が科学で解明されているわけではない。

妖怪や心霊現象が信じられ、UFOを見たという人は後を絶たない。

伝承・伝説の中の鬼、天狗といった妖怪たちにやさしいまなざしを向けることで、彼らのほうも近づき、「まちおこし」に協力してくれる事例は多い。そうした物語を今回紹介してみたい。

よみがえる ミステリー伝説のまち

妖怪祭り＝鳥取県境港市
水木しげるの漫画をテーマに、妖怪祭
りなどのイベントが盛りだくさん。写
真は「鬼太郎音頭保存会」による踊り



日本一の天狗面
栃木県湯津上村
光丸山伏天狗面は、
高さ1.5m、重さ1.5t。
寄木造では日本一の大きさを誇る





UFOコスモアイル羽咋＝石川県羽咋市

伝説を現代風にアレンジしUFOでまちづくり。博物館にはポストークプセルなどの実物が並ぶ



祖谷平家祭り＝徳島県東祖谷山村

平成11年、7年ぶりに祭りが復活。「粉引き節日本一大会」などが行われ、祖谷そばがふるまわれる



恐竜の島＝鹿児島県御所浦町

御所浦町は貝類化石が豊富に出土し、平成9年には国内最大級の恐竜化石が発見された



弁慶まつり＝北海道寿都町
援軍を待ちわびた弁慶・義経をなぐさめようと八月、一行に扮した若者の「祭火渡御式」が行われる



キリスト祭＝青森県新郷村
キリストの墓があるといわれている丘の上で盆踊りナニヤドヤラが奉納される



たたら鉄づくり＝岡山県総社市
鬼伝説と古代たたら製鉄づくりを結び付け、まちおこし



市民ミュージカル＝愛知県大山市
応募した市民全員が舞台上に登場し、大山市の民話・伝説をもとにした創作ミュージカルを演ずる。写真は「桃太郎伝説」



村田純一

財団法人地域活性化センター会長

21世紀・活力ある地域社会づくり

このたび、前任の牧会長の後を受けて新しく財団法人地域活性化センター会長に就任いたしました。二十一世紀の活力ある地域社会づくりに懸命の努力をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

大競争時代に入りまして、企業だけでなく、国や地域においても魅力があるかどうかで差がついてきます。各地域が自主的に個性・魅力溢れる地域づくりに取り組んでいかなければなりません。

ヨーロッパのまちをいくつか回って感じますことは、それぞれが共通して国というよりも独立したまちという意識が強いということです。それは、ヨーロッパがまちから出来上がったコミュニティであり、その後国家が形成されたという歴史的経緯によるものではないかと思っています。

自分たちのまちだからこそ、きれいにしよう、便利にしようという姿勢につながり、また、まち同士が競争することにより、経済の活性化、歴史的な建物・美観の維持、文化の充実が行われ、発展を促進しているように思います。

二十一世紀には世界的な規模で交流時代を迎えると言われると思います。いきおい、観光が基幹産業として重要な位置を占めてくるものと期待され、各地域での観光産業振興はますます盛んになっていくでしょう。この観光産業を一層発展させるためには、地域の恵まれた歴史的文化資産の活用はもとより、魅力ある大型集客施設の整備、創意と工夫に富んだイベントの創出などの新しい取り組み、観光客を

温かく歓迎する「おもてなしの心」の育成などを進めていかなければなりません。

自然はおのずから美しいものです。山々、海、湖、河川、それぞれ趣があります。人工物はそれに反して概して見苦しいものです。したがって、建物、道路、橋などは周囲に溶け込み、また周りの自然を引き立てるデザインが必要です。ヨーロッパではどんな小さなまちであつても絵になる風景、写真を撮りたくなるまち並みが豊かですが、日本は観光スポットだけ小奇麗にしているに過ぎません。景観と調和しない醜悪なビルや看板などでまちを汚しています。行政がまち全体のデザインを考慮して施策を行うとともに、住民の一人ひとりがコミュニティの一員であることを意識して大きさや色の調和を図り、緑を増やしていけば観光客にとっても住民にとっても美しく魅力あるまちとなり、自然に人が集まり地域経済も独自性を出せるようになります。

日本は伝統的に「匠の技」を大事にし、各地域にはその歴史と文化にはぐくまれた名品があります。時代に適合した変化を取り入れ、優れた感性と技術を生かし、私たち日本人の本来の良さを取り戻し、コミュニティの一員として誇りや歴史を共有する、個性的で活力ある地域社会を実現するために、経済基盤の強化、人づくり、ネットワーク化などが必要であり、地域活性化センターの果たす役割には極めて大きなものがあると存じます。

今後とも皆様方のご支援のほどをよろしくお願いしたいと思います。

ミステリーのみち「地域おこし」は



神崎宣武 民俗学者

文化的アイデンティティの確立から神話・伝説の見直し、再生の機運

各地に「神話」があり、「伝説」がある。

日本に限ったことではない。が、日本では、比較的早くそれが文章化された。たとえば、八世紀早々に『古事記』が、次いで『風土記』が編じられた。前者には神話が含まれ、後者には伝説が含まれている。

「地域おこし」神話・伝説を見直し

記録されない口承のままの神話や伝説も数多い。近年、そうした各地に伝わる土くさい神話や伝説をもう一度見直し、それを現代に再生させて伝えようとする機運が生じている。いうならば、「地域おこし」の一つのテーマに神話や伝説を取りあげるところが出て

きているのである。

というか、それは、代々繰り返した作業である、といえる。国家や官僚や学者などとは別な世界で、地方の人びとは、身近な「口承の文化」を大事に伝えてきたのである。それを繰り返し繰り返し伝えてきたからこそ、神話や伝説からなる「名所」ができていくのである。また、新たな「物語」や「歌謡」が生まれものである。

「むじなと天狗」

たとえば、群馬県の館林市の茂林寺には分福茶釜が伝わる。それは、数千年のよわいを重ねた狸（もみぢ）の化身である守鶴が、湯をいくらく

んでもなくなならない茶釜の意味を説いた、という伝説に基づくものである。それが、のちに草双紙にも描かれ道化狸を生み、さらにそこから童謡を生んでいるのである。

京都の鞍馬山は、さらによく知られる。ここでは、鑑真の開基霊異とともに「天狗だおし」の伝説が伝わる。その天狗伝説が、のちに『義経記』に反映され、さらに謡曲「鞍馬山」に転じ、あぐくは映画の「鞍馬天狗」にまで展開するのである。

「温羅と吉備津彦」

岡山の吉備地方では、吉備津彦の神話が数多くの名所を生んでいる。

吉備津彦命は、大和時代に諸国へ派遣された四將軍の一人である。吉備国で吉備津彦を



温羅（面）

待ちかまえていたのが温羅であつた。温羅の本拠は、吉備路の北にそびえる鬼城山で、ここに立てこもつた温羅は、命の軍勢を目がけて巨岩を投げつける。命の軍勢は、それに矢を放つて応戦。巨岩と矢が空中で衝突し互いに相手まで届かず決着がつかない。そこで、命は、同時に二本の矢をつがえて放つという法を講じた。これが功を奏して、しだいに温羅は傷つき、温羅の目から吹き出した血潮が川に吸い込まれて川が真っ赤になった。この鬼城山から流れ下る川はいまでも「血吸川」と呼ばれている。そして、下流の赤く染まつた岸辺は、いまも「赤浜」という。

追いつめられた温羅は、鯉に化けて川づたいに海へ逃れようとしたが、吉備津彦命は、鵜に化身してその鯉に食らいついた。その古跡として「鯉喰神社」が倉敷市矢部に存在する。

捕らえられた温羅は、首をはねられたが、その首は何年たつても大声を出してうなり続けた。吉備津彦命は、家来の犬飼武命に命じて犬に温羅の首を食べさせたが、ドクロになつてもうなるのをやめない。そこで、命は、吉備津神社の御釜殿の土中深く首を埋めさせたが、なお十三年うなり続けた。ある夜のこと、命の夢枕に温羅が立ち、「わが妻、阿曾姫に釜の火を炊かせてくれ。そうすればこれまでの悪行の償いとして、この釜をうならせて世の吉凶を告げよう」と言った。それが、

いまに伝わる吉備津彦神社の鳴釜神事なのである。

なお、そうした温羅伝説は、上田秋成の「雨月物語」にも描かれて、すでに有名である。

鬼がテーマの地域おこし16例

神話や伝説から名所化、あるいは戯曲化や歌謡化した右のような前例をみると、なかでも「霊異譚」「妖怪譚」に基づくものが多いことに気づく。そして、その傾向は現代の地域おこしにも踏襲されることもある。現在の地域おこしのなかで、とくに注目されるのは各所で「鬼」が再生されていることである。

京都・大江町が鬼で先べん



日本の鬼の交流博物館(京都府大江町)

かつて、一般的なイメージでは、鬼は、人間にとつての嫌われ者であつた。節分での「福は内、鬼は外」、おとし話での「鬼退治」がそのことを如実に物語っている。なのに、その鬼をもつて地域おこしをする、その一連の活動が近年とみに盛んになったことは、何を意味するのであろうか。

その一連の活動は、京都府大江町の「日本の鬼の交流博物館」設立にはじまる。

そもそも大江山には、三つの鬼伝説があつた。もつとも古いのは、日本国が成立したころ、陸耳温笠という土蜘蛛が日子坐王に退治された話で、『古事記』や『丹後風土記』などに伝わる。二つ目は、聖徳太子の弟にあたる麻呂子親王が、三上ヶ獄(大江山の古名)で英胡・軽足・土熊などを討つた話。もう一つは、酒吞童子の話で、これは全国的に広く知られる。そして、大江山の周辺には、「鬼の岩屋」「頼光の腰掛け岩」「酒吞童子屋敷跡」などといった伝説をとどめる多くの遺跡が残されている。山頂近くの谷あいには、「酒吞童子の供養碑」までみられるのである。

その鬼をテーマに地域おこしがはじまったのは、時代が昭和から平成に変わったころであつた。

大江町は、養蚕業と河守鉦山に支えられて豊かな町であつた。だが、農林業の衰退によって鉦山も閉山となり、人口が激減して過疎



化の一途をたどった。そして、府下唯一の高
齢化率の町ともなったのである。そこで、過
疎という魔物を鬼で追い払おうと、酒吞童子
をまちおこしの旗印として、活性化の取り組
みを始めた。その中核施設として誕生したの
が「日本の鬼の交流博物館」である。

だが、鬼に関する過去の資料もない、財源
も乏しい、準備期間も短い、というないない
づくしのなかで生まれた結論は、手づくりで
いくしかない、ということであった。町の職
員を中心に、鬼を探し求めている全国行脚。そ

のなかでさまざまな交流が生じ、八百を超える
市町村から資料を提供してもらった、とい
う。

鬼は人間の力を超えたもの。とりわけ、火
山や地震など自然の猛威に対する恐れが原像
となっているのではないか。そして、人の心
の奥深くすみつき、親しまれ、恐れられてき
た。鬼は、それぞれの時代を生きてきた人び
との心を逆照射したものではないのか。私た
ちの祖先が鬼をつくりだし、鬼を通して私た
ちに語りかけたかったものは何であったの
か。それを論じながら進めていった、と村上
政市氏（日本の鬼の交流博物館館長）はいう。

民俗的視点で アプローチ

その結果、博物館づくりに当たっては、民
俗学的な視点からのアプローチを試みるこ
ととなった。

博物館は、展示ホールと交流ホールに分か
れている。展示は「鬼とは何者か」「大江山
の鬼伝説」「日本の鬼瓦のうづりかわり」の
三コーナー。交流ホールは、会議・研修・音
楽会・遊びと多目的に利用できるようになっ
ている。壁面には、現代の画家たちの描く鬼
の絵を展示、一角に、ビデオコーナーも設け
られた。ただ展示を見てもらうだけでなく、
鬼を通して人びとが語り合い、交流し合い、
学び合う場としたい、という思いからである。

また、鬼を通しての交流の中から、次々と
新たな施設が誕生していった。大江駅前の
「鬼瓦公園」や「大江山平成大鬼」。さらに、
酒吞童子の里の整備も一段と進み、「京都府
大江山青少年グリーンロッジ」が完成。従来
からあった「大江山の家童子荘」と共に受け
入れ態勢も整い、「ちびっ子広場」「野鳥の森」
「鬼のモニュメント」「キャンプ場」など、豊
かな自然と触れ合いながら、憩い、遊び、学
ぶ場としてにぎわいをみせている。

善へよみがえった鬼

こうした大江町の地域おこしは、マスコミ
も注目することになり、訪問者も飛躍的に増
えた。何よりも、町民の誇りが高まった。か
くして、大江町において、鬼は「悪」から
「善」へとよみがえったのである。

もともと、歴史的にみても、日本の鬼は善
悪の両義性を有していた。つまり、ときに善
となり、ときに悪ともなる。悪い鬼でも改心
すれば善となり、その鬼を呼んで守護を託す。
たとえば、屋根の鬼瓦は、鬼の霊力をもって
建物の守護をする、鬼を味方に見立ててのま
じないの印である。こうしたことは、極めて
日本的な心情文化といえるべきものである。と
いうことは、酒吞童子にみられる悪行の前歴
をもつ鬼に地域おこしを手伝わせる手法もま
た、日本文化的といわなくてはならないだろ

「評価に値する 鬼サミット」

さて、さらに特筆すべきは、平成五年（一九九三）に、ここで「鬼サミット」が開かれたことである。出席は十二町村。それが、以後毎年開催地を変えて、今日に継続しているのだ。そして、平成十一年度伊賀上野（三重県）での「第六回全国鬼サミット」では、参加が以下の十六町村に広がった。登別市（北海道）・北上市（岩手県）・鬼無里村（長野県）・柳田村（石川県）・上野市（三重県）・白山町（同県）・青山町（同県）・熊野市（同県）・九度山町（和歌山県）・大井町（京都府）・亀岡市（同府）・溝口町（鳥取県）・茶屋町（岡山県）・総社市（同県）・神辺町（広島県）・高松市（香川県）である。

継続は力なり、という。それには、この連携・連帯の歴史はまだ浅い。だが、例の「ふるさと創生」でわき返った二千を超す地域おこしの事例の今日への持続性が多くない実情からすると、この十六町村による鬼サミットの継続は、十分に評価に値するのである。

求められる国際社会の中の 日本の地域おこし

今後は、国際社会の中での「地域おこし」の連携も求められよう。従来のように、ただ姉妹縁組を結んで人的交流を図る、そうしたレベルでは十分でない。とくに、近隣諸国との、テーマを定めた文化交流が求められる時代になったように思える。

たとえば、ちょうど今、私のもとに韓国の某研究財団から「祝祭による地域文化振興」のワークショップへの日本からの事例発表者と意見交換者の派遣依頼がきている。少なくとも、私の知る韓国の識者たち、とくに若い担当者たちは、文化的な地域おこしでは日本が先進として、謙虚に教わろうとする姿勢がみられる。

むろん、私どもも誠実に応じなくてはならない。そのとき、「神話」と「伝説」は、格

好のテーマとなるだろう。なぜならば、それは、これまで双方が避けてきたテーマであり、取り組みがむづかしい。むづかしいがゆえに、対立を恐れず議論をつくす価値がある。議論を尽くしたところで深い友情が芽ばえる、その期待がもてるのである。

あくまでも、「鬼」にこだわっている。たとえば、先に示した吉備神話における温羅は、地元での伝承でも鬼サミットでの発表でも、朝鮮半島から飛来してきた異相の者とする。それは、それでよい。が、韓国の人たちに對して、その真意をどう説明すればよいのか。私とすれば、鬼サミットあたりで「古代日本人の異人に対する視点」を論じてもらいたい。そのうえで、それを曲げることなく堂々と韓国の人たちにも通じる文化性として説いてもらいたいのである。

思えば、私ども戦後世代の日本人の多くは、神話や伝説をどちらかというと疎んできた。学校教育では、『古事記』や『風土記』のさわりさえも教えてこなかった。それには、それなりの意味もあっただろうが、日本人をして文化的アイデンティティを喪失させる、一つの象徴的な出来事であった。そのことを、最近ではむしろ海外の日本研究者が発言しているのだ。いま、地方からそれに応呼できそうな活動が生じている——そのさらなる発展を期待したいものである。



鬼瓦

ミステリー① 北海道寿都町

寿都町は、北海道西部の日本海に

面し、函館と小樽のほぼ中間に位置

する総面積九七・三四平方キロの町。西暦六五

八年、阿部比羅夫が蝦夷を討つために、百八

十隻もの軍船を率いて寿都湾に入港したとい

う伝説もあり、寿都の歴史の幕開けは早い。

至るところに弁慶・義経の足跡

奇岩が連なる寿都町の政治海岸。その中で一段と日本海に突き出す弁慶岬。そこに、遠く海原を眺める弁慶の銅像が建つ。

奥州は平泉で藤原泰衡に討たれたとされている義経・弁慶一行にまつわる数々のエピソードがなぜ、北国の寿都町に残され、現代まで語り継がれているのか。

義経・弁慶一行は平泉で討たれることを予知し、義経の身代わりをたて、東北各地を潜行、蝦夷地に渡り、松前・函館・乙部浦を経て西海岸を北上して、寿都・岩内方面に向かったとの足跡は、いたるところにある。

寿都町には、長期間滞在し、都を追われ、



弁慶像

って蝦夷に向かったとの情報を得る。弁慶は、岬の先端に立つて海尊の到着を待ったが、ついに海尊軍団の船影を見ることはなかった。小さな和船では潮の流れの荒い津軽海峡を渡船することはとうてい困難であったのだろう。

長期間滞在した弁慶は、別れを惜しむアイヌの人たちと、二つ森の頂上で別れの宴を催す際に、秘蔵である金の銚子と金の盃をそれぞれ用意し、再び生まれ変わってやることを約束し、銚子と盃を二つ森と糠森の間の白枯梗の根元に埋め、「これを掘り起こす者には必ず天罰が下るであろう」と言い残し、雷電海岸のほうに去って行ったという。再び生まれ変わってくるとは、どのようなことなのか、それは弁慶自身と二つ森に埋められた秘蔵の宝だけが知っているのかもしれない。

度胸試しのしづきが炎えて、朝だ出舟だ新風だ、北に雷電南に茂津多、潮もかがやく潮もかがやく、ここは名所弁慶岬—のお離子ではじまる「弁慶音頭」で町中がにぎわい、義経・弁慶伝説の勇壮な時代絵巻きに酔いしれる「寿都湾弁慶祭り」が毎年八月の十四、十五の両日開催される。このイベントは、昭和

北海道でよみがえった弁慶・義経 岬に援軍を待つ銅像



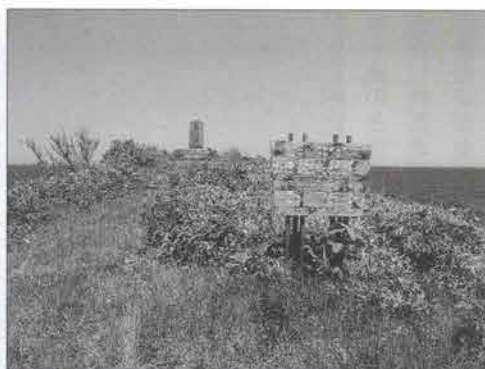
山川英俊

寿都町広報統計係長

五十年から産業祭りとして、地元の商工会青年部が主催。募参のため帰省する人たちが長期間出稼ぎしている人たちがすぐ戻ってしまうことなどから、一日でも多く滞在してもらい、さらには町の活気にもつながるものを何かやろうと、始めたもので、毎年開催し、義経・弁慶にちなんだゲームを取り入れるなど、今ではすっかり町の最大イベントとして町民に定着している。

とくに、一日目の前夜祭の最大の呼びものである「祭火渡御式」では、はるか弁慶岬から和船で上陸した、弁慶・義経と家来の装束をまとった若者が、暗闇の会場を弁慶太鼓が打ち鳴らされる中、たいまつを掲げ登場し、ステージでは町長との口上が交わされる。ロマンに満ちた弁慶伝説は、遠くはるかかなたの時代から時空を超え、姿を現し、多くの人を魅了する。また、武蔵坊弁慶の強さにあやかろうと、太さ五十センチもの丸太を五人で押し合う「武蔵棒弁慶の怪力自慢」競技や、町の特産品・海鮮魚介類一杯の「弁慶の味自慢」の販売など趣向をこらしたイベントが行われ、この期間は町内外から町の人口の三倍に当たる一万人もの人でにぎわいを見せる。

寿都町では、古来から伝えられる義経・弁慶伝説を大いにまちづくりに生かそうと、弁慶岬に、仲間の船の到着を待ち続ける弁慶の姿を再現した、高さ三・六メートルの銅像を建立した。岬を公園化するため、休憩所やトイレなどを整備するとともに、まちづくりは美しい環境からと、観光シーズンの始まる時期に、岬の周辺を町内の各団体による清掃奉仕作業を行っている。



弁慶がアイヌと相撲をとったといわれる土俵跡



武蔵棒弁慶の怪力自慢 競技



祭火渡御式

も建てた。平成四年には歴史と伝説いっぱい町のイメージアップとなるよう、町内でまちづくり活動する若者による「弁慶太鼓同好会」も結成され、直径四尺三寸の大締め太鼓一台と胴太鼓九台を購入。大地を揺るがす響きは勇壮で、町内の各種イベントや福祉施設の慰問をはじめ、道内各地でも披露し活躍している。

キャラクターが波及効果

また、町出身の漫画家による弁慶のキャラクターを作成し、交通安全の看板やキーホルダー・魔除けの豆下駄、水産加工品や菓子などの包装にも大いに利用されているほか、北海道出身の北島三郎さんによる町のイメージ

している。

ミステリー② 青森県新郷村

新郷村は、青森県のほぼ南端に位置し、東西二十二^キ、南北九^キの総面積一五〇・八五平方^キの農山村で神秘の湖、十和田湖への東玄関口にある。

人口は約四千人で基幹産業は農業である。総面積の八〇%が山林原野を占めていることから林業も盛んで、明治の時代には木炭生産量日本一に輝いた時期もあった。畜産も盛んで、ホルスタイン、肉牛の日本短各種、黒毛和種などの牛も放牧されており、新郷村（旧戸来村）は青森県の酪農の発祥地とも言われている。

キリストは二度来た

そんな小さな村にキリスト伝説なるものがある。ただし、昭和十年に突如として湧いて出てきたことから「湧説」とでも言ったほうがよいのかもしれない。

イエス・キリストは地中海の沿岸ユダヤで生を受けエジプトに父ヨセフと母マリアとともに住み、ナザレの片田舎で成長するが、二



キリスト祭で奉納される獅子舞

十一歳のときに行方不明となる。三十三歳のときに突然と現れ、天国を語り、神の存在を説いたとされているが、その間の行動は聖書によっても明らかにされていない。

ところが昭和六年に茨城県で発見された竹内古文書にはその間のキリストの消息がきちんと書かれてあったという。その古文書によ

古文書をもとにキリストの墓でむら復活

青森で天寿全う説！欧米からも見学者



角岸秀伸

(財)新郷村ふるさと活性化公社総括技師

れば第十一代垂仁天皇の時代、二十一歳のときに日本海沿岸の橋立の港（現石川県能登半島）に上陸し、越中の国の尊きお方のお弟子となり、日本の言葉や文字を習い、さまざまな修行を重ね、三十三歳になって日本を去り、ユダヤに帰る。が、キリストの教えは当時のユダヤの長老やパリサイ派の学者の猛反対に遭い、ついにはローマ兵に捕らわれ十字架に架けられてしまう。ところが古文書によれば十字架に上ったのは弟のイスクリであったとされている。その後、キリストは弟子たち数人とシベリアへと走り、各地を遍歴しながら四年後に青森県八戸港に上陸し、現在の新郷村戸来に住居を定め、日本人女性をめぐり、三女をもうけ、百六歳の天寿を全うしたと古文書にはある。現在、キリストの墓があるといわれる土地の所有者がその子孫という。

そもそも、このキリスト湧説は昭和六年に茨城県の神宮から発見された古文書の発見が始まりで、昭和十年にその古文書を発見した神宮の管長、古代史研究家数人が戸来村（現新郷村）を訪れたことにより、小高い丘にあった土饅頭がキリストの墓ではないか、とい

うことから端を発している。

当時の新聞は「神を冒とくするものである」と何回か非難したが、この話はとどまるどころかエスカレートするばかりで、いやというほど、手厳しい批判があつたと聞いているが、今はその批判すら聞くこともなくなつてしまつた。

祭りは神式で

キリスト様の霊をお慰みするため、昭和三十八年から毎年、六月の第一日曜日にキリスト祭を観光協会で開催している。それに至るまでには過去二回ほど開催日が変更になつてゐるが、県内ではもともと古いイベントでもある。

キリスト祭というのは、簡単に言えばキリスト様の慰霊祭で、神主が祝詞をあげた後、玉串を捧げ、奉納の獅子舞、意味不明の盆踊唄・ナニヤドヤラを奉納する。神式でやるのはおかしいと思われるかもしれないが、一回だけ牧師さんで試みたそうだが、地元の人に合はずそれ以降、神式で行つてゐる。ちなみに、ナニヤドヤラという言葉は梵語とかユダヤ語に由来するなど四説がある。

そして、キリストにかかわる短歌の入選発表会を行い、第一部は終了する。会場をキリストの墓から森林レクリエーション施設「間木ノ平グリーンパーク」に移し、第二部の

「野宴」が始まる。キリスト渡来説、子供たちの郷土芸能の披露、婦人たちのナニヤドヤラ踊り、民謡ショー、山村特有の山菜入りのお汁、清酒キリストの里を飲み、祭りは大盛況となる。当日は、ミステリーゾーン体験バスツアーなども開催され、ユニークなガイドがキリスト渡来説を詳しく説明している。

ピラミッドが相乗効果

開催当初はほんのわずかな関係者で慰霊祭を行つたと聞いているが、昭和五十六年ごろから村でも観光開発が進み、公園の整備、キャンプ場の整備など着実に観光に対する意識が高まりをみせ、観光協会の事務局もそれ以前は商工会で行つていたが、六十年からは行政で行つてゐる。最近では国内だけでなく世界中の観光客、アメリカやヨーロッパのジャーナリスト、テレビ局などが訪れるようになった。キリストの墓周辺も平成七年までは墓のみであつたが、国から補助をいただき、キリストの里公園として整備され、八年には伝承館も設置された。そのほかにも村には日本に七基あるとされている数万年前のピラミッドが一基ある。キリスト様同様、村の活性化に大きな役割を果たしている。

雇用促進へ活性化公社

平成八年からは酪農の発祥地にふさわしく

酪農関連の施設を整備。ホルスタインの乳搾り体験、ポニーの乗馬体験など、小動物たちとの触れ合いの場など、子供たちには大人気である。また、安全な村内産の搾りたてのミルクを使用した、ニンニク入りアイス、長芋入りアイス、飲むヨーグルトなどの製造販売も行い、若者の雇用の場としてふるさと活性化公社も誕生した。

キリストの霊をお慰みする目的で開催されたキリスト祭は着実に地域経済の活性化そして村づくりのために大きな成果をあげている。

このように新郷村にはたくさんさんの神秘ロマン、風土、文化があり、これからも貴重な財産として村民一体となり、後世に伝えていくためキリスト祭、キリスト湧説など大事に残していきたい。



竹内古文書のレプリカなどが展示されているキリスト伝承館



3 栃木県湯津上村 ミステリー の まち

赤い顔に高い鼻、山伏の格好をして手に羽団扇をもち、空中を自由自在に飛行する。天狗といえば、一般的にこんなイメージがある。もちろん架空の存在だが、全国各地には天狗に関する伝説や、これを祀る社寺などは数多い。

栃木県の北東部に位置する湯津上村。北には大観光地那須を控え、東には鮎釣りのメッカ、清流那珂川が流れる農村地帯であるが、古墳などの歴史遺産も数多く、古代那須国の中心地域としての栄華を今にとどめている。

天狗の鼻が村助け

こうした本村にある天台宗の古刹、通称光丸山法輪寺として親しまれているこの寺には、高さ二肘、重さ一トにも達する巨大な天狗面が奉納されている。寄せ木造りとしては日本一の大きさ。昔、暴風で木が倒れ天狗堂が破壊されながらも、中の天狗は倒木を鼻の先でしっかりと受け止めたという逸話もある。その鼻の長さは実に一・三肘もある。

そもそもこの大天狗面は、一八八〇年（明

治十三年）、本村の南方にあった東富山村（現在の栃木県馬頭町富山）の住人が奉納したもの。当時同村内では盗難や火災が頻発し、これらを天狗の仕業と考え、これを鎮めるために光丸山へ奉納したと伝えられている。

天狗の伝承については、鬼や山姥とともに、山の支配者である山の神としての信仰のほか、山中で起きるさまざまな怪奇現象を天狗の仕業としたり、天狗が人間によって簡単に欺かれてしまう愚かな存在として伝承されたりするなど、地域によってさまざまな姿に描かれている。

東富山村の例に見られる天狗のつけ火は、天狗が粗末に扱われた火を取って火災を起こすというもので、あちこちに飛び火し、どんなことをしても消火できないといわれている。

この反面、防火の神としてのいわれもある。冒頭のイメージのように、山岳での修行を通じて超自然的な能力を獲得しようとする修験道と深いかわりがあるという。修験道の教義類に天狗は登場しないものの、修験者の火渡り修行や、崇拜対象の不動明王が光背に火炎を背負っていることから、火伏せの神と

しての信仰が生み出されたといわれている。

ところで、大天狗面が安置される光丸山は、毎年十一月三日（平成十年までは十二月十三日）の大縁日に神輿の渡御が行われている。寺と神輿？ と不思議に思われがちだが、同寺は神仏習合の名残を残す珍しい寺としても知られている。梵天の後に、天狗面、高足駄、手には矛という猿田彦が先導し、香箱、僧侶、白の行衣をまとった行人が担ぐ神輿と続く。かつては近くの川をまたいで立つ鳥居をくぐって身を清め、奥の院まで詣でていた。

猿田彦は一般に道の神、道祖神として知られるが、天孫降臨の際、ニギノミコトを案内するために道の途中で待つ神様として『日本書紀』の中に登場する。記述されたその風体がまさに天狗をイメージさせ、ここから猿田彦が天狗の祖とされている。その有様を光丸山の神輿渡御でかいま見ることができる。

天狗をミニ独立国のシンボルに

昭和六十三年、本村の中央部で温泉掘削に成功。にわかに温泉活用の活性化熱が高まり、温泉浴場を皮切りに、研修・宿泊施設、公園

日本の天狗自負にむらあいつ

運営は行政から住民主体へ



長谷川 操

湯津上村企画調整課庁舎建設準備係長

などを次々に整備していった。

こうしたハード面を整備する一方、この時期は、地域PRの手法の一つとして「ミニ独立国」の建国ブームが巻き起こっていた。同時にふるさと創生資金の登場もあって、本村としても大勢の参拝客を集める大天狗面に着目。その大天狗面をシンボルとして、平成元年、「てんぐ」の語呂合わせで、十月九日に



天狗王国ゆづかみのふれあい祭

「住民が一致団結して人づくり、組織づくり、地場産業の拡大、観光開発に努め、国際社会において名誉ある地位を確立すること」を目的としたミニ独立国「天狗王国」の独立宣言を発したのである。

建国当初は、シンボルマークやのぼり、天狗だるまの制作、王国音頭の創作、天狗踊り振り付けなど、王国PRの必須アイテムを次々に

つくり上げ、対外的なPRに役買ってきた。

王国の運営は、行政主導といわれながらも、基本的には村内の農業や商業などのさまざまな業種、女性や高齢者などのさまざまな世代のリーダーを構成員とした天狗王国推進協議会による。建国後十有余年が経過し、この間多くのミニ独立国の活動が休止、消滅した。天狗王国が生きながら存在しているのは、シンボルが日本一の自負をもてる揺るぎない存在であること、全村体制で臨む二大イベント夏休み中の「夏祭」、十一月第二土・日曜日の「ふれあい祭」を主催していること、これらを踏まえて地元住民の心に深く浸透しているといったことが挙げられようか。

住民の手でどろんこレース

しかし、やはりマンネリ化との闘いはついて回る。とくにイベント開催にその傾向は強く現れ、これに対して住民は敏感に反応した。結果、水を張った田んぼの中を家族や仲間がリレーで競う「どろんこレース」を住民自らの手で生み出し、千人もの観客を集めるまでに成長。天狗踊りも自らの手で保存、伝えようとする機運も高まり、その保存会も結成。さらに、現在休止状態にある伝統行事の復活に向けた計画も進展中である。まさに運営主体が行政から住民へと移ってきた瞬間である。また、天狗ブランドの活用も見逃せない。

本村は米のほか園芸作物の生産も盛んであり、特産のニラ、ホウレンソウなどに王国のシンボルマークを表示、ブランド化が図られ、天狗名が付いた農産物直売所が現れるなど、あちこちで天狗が増殖してきている。

ふれあい祭で天狗踊りを踊る子供たちが登場するとき、天狗人口は一気にピークに達する。幼少期の記憶は一生もので、彼らが成長して仮に村外にその身があっても、誇れる村の



天狗ブランドのホウレンソウ

ネタとして天狗の姿が鮮やかに蘇るであろう。それが本村定住への足がかりにもなる。

今、湯津上村は、淡水魚の展示種数、点数では日本一を誇る水族館がある栃木県立「なかがわ水遊園」のオープン、二〇〇二年開催のサッカーワールドカップ公認キャンプ候補地としての誘致活動の渦中にある。ここでも、羽団扇を手にした天狗があちこち飛び回りながら手招きする姿が見られそうである。

ミステリーのみち 4 石川県羽咋市

石川県羽咋市は、能登半島付け根の口能登に位置する人口二万六千人のまち。繊維産業がすたれ、観光にシフトしつつある。

昭和五十九年十一月、羽咋公民館で初めてUFO（未確認飛行物体）展「二十一世紀と羽咋市との邂逅」と題された文化祭が行われた。主催は、市内の青年団体が構成する羽咋市青年団体連絡会議で、どうすれば地域が活性化できるのか、また、まちづくりとは何なのかを研究するための学習会であり、全国の百十四カ所の地域を調べ、まちづくりの方法、成功例と挫折例など調べ上げて、それを自分たちの町に生かそうとするためのものであった。この学習会は約二年以上も継続され、ここから生まれたのが、一つの理念「ふるさと創星論」であった。

全国114のまちづくりを調査

百十四カ所を調べると、一つの特徴が分かってきた。それは、経営理念のないまちづくり運動は、長続きせず消滅していたということ

伝承・伝説をもとにUFO博物館

青年たちが徹底的なまちづくり作戦

とである。しっかりと考えた方がないとこころは、もって三年程度、早ければ一二年で消滅していた。羽咋の青年たちが考え出したまちづくり理念の基本は社会を構成する最小単位である「家」を「町」に見立てたことで、つまり、地域が一軒の家のように運営されること、まちおこしは心おこしであること、それがまちづくりの究極の理想であることを見つけた。

伝説との出会い

地域活性には町の批判家、評論家はいらない。自分の町をけなす住民は多いが、誇る住民は少ない。こうした中で、わが町のギネスブックづくりに乗り出した。自分たちの町の一番誇れるものを見つけたための郷土愛をはぐくむ第一歩でもあった。羽咋市チャンピオン協会を羽咋市青年団体連絡会議の有志で結成しギネスブック作成を開始した。

この過程で、羽咋の邑知平野に伝わる不思議な伝承・伝説が発見された。「そうはちぼん伝説」（江戸時代）がそれである。伝説には「西山の中腹を東より徐々にうつりゆきし

怪火をそうはちぼん、或わによはちという」と書かれてあり。麦わら帽子のような形状をした物体が光りながら飛行したという記述が残されていた。

また、「空からなべが降りてきて子供がさらわれる」という「なべふりの伝承」（時代不明）があり、さらに「氣多古縁起」（平安時代といわれる）には、空飛ぶ不思議な珠について書かれてあった。現代で解釈するなら、まさしくUFOの伝説そのものである。これを拠り所に地域活性、すなわちまちづくりを実践しようとする青年の団体「羽咋青年魔訶不思議倶楽部」が形成され、「UFO神話のまち」を売り出す戦略や知名度アップのための「マスコミおこし」などを展開した。

マスコミ使い「HAKU」売り出す

どんなにつまらないことでも、マスコミに登場するよう継続することで全



高野誠鮮

コスモアイル羽咋主任

コスモアイル全景



マーキュリーレッドストーンロケット（一、二段目は実物の胴体）



国に周知できる。これが「マスコミおこし作戦」である。マスコミへの通知は、地元から一番遠い北海道から開始。九州、東北、中国・四国、最後に北陸へと外から内側に情報が流れるように仕掛けていった。またもつと大きな外堀作戦は海外の通信社への配信であった。AP、AFPなどへ毎日のようにファックスを送り続け、海外のメディアにHAKU UIという名前が乗るように仕掛けた。ウォール・ストリート紙、プラウダなどメディアで取り上げられた。

こうした活動が開始された時期、人脈拡大作戦を取り、手紙を書き続けた。最初に書いた相手は、ゴルバチョフソ連共産党書記長であった。下手なロシア語や英語混じりでクレムリンあてに、当時のレーガン米大統領にも、ローマ法王にも、世界を動かす人たち百二十人に手紙を書き続けた。文面は実に簡単であった。「日本の石川県でUFOをテーマとしてまちづくりを始めた十二人の青年です。これに対して貴殿はどのように思われますか。励ましのご返事をください」という内容であった。日本の首相にも何度も出している。最初に返事が来たのはソ連大使館広報部からで「書記長は大変多忙で直接回答できかねますのであしからず」という和文タイプの返事であったがわれわれは打てば響くことを実感した。

こうした動きに呼応するように、町には、UFOラーメンなど次々UFO関連商品ができあがっていった。こうした展開に、市長は「市は青年と市民の活動を支援する」と明言した。その翌年の平成二年に市スタッフと市民による「宇宙とUFO国際シンポジウム」の予算が五百万円計上された。ところがこのイベント全体には、約六千万円かかることが分かり、関係者は協賛金集めに東奔西走することになる。このイベントは結局、四万五千二百人もの入場者を数え、二千万円の黒字を生み大成功を収めた。プロの手を徹底的に省き、できることは自分たちで行うを基本とした。実行委員会は高校生も含め約二百人であった。成功に終わったことで、最後の日に実行委員長だった市長は反省会の席上、一言もなく、涙だけが流れていた。この姿で会場の二百人全員がうれし泣きであった。

念願の「コスモアイル」がオープン

平成二年十一月開催された「宇宙とUFO国際シンポジウム」は内外から高い評価を受け、この成功を受けて旧自治省のリーディングプロジェクトとして採択され、宇宙開発・SETI（地球外知的生命探索）UFOをテーマとした宇宙科学博物館「コスモアイル羽咋」が平成八年七月オープンした。特筆すべきは、「国立の博物館でも玄関にあるロケッ

トはレプリカ。この町の博物館には本物があつた」「日本のスミソニアン」と新聞に書かれたように、実物の宇宙機材を中心として展示している点であり、直接NASAから百年間ただで借りたりしている。少しの勇気と知恵と行動力によって小さな町でも、住んでいて楽しい町となる。まちづくりへの提言は机上から生まれない現在進行形の中から出てくるものではないだろうか。

UFOが、現代にとって異文化を象徴する第二の黒船であるならこうした不思議な伝承・伝説が残されている羽咋はまさに宇宙の出島であろう。コスモアイル羽咋の基本構想は「宇宙の出島能登―羽咋プロジェクト」と命名された。「UFO神話のまち―羽咋」はこうした背景のもとに生まれた。

コスモアイル羽咋は毎年平均二十万人の来館者を迎えている。今年の夏からは日本の宇宙開発の歴史を博物館で展開する。実際に実験で使用したエンジンの燃焼室や日本の宇宙ステーション「きぼう」で使われる部品など本物を展示する予定だ。本物は時がたてばその町の財産になる。博物館の原点に戻る努力を今後も継続して、羽咋市が全国に誇れるこだわりの博物館を目指していきたい。



＜展示フロア＞

（左）ルナローバーの再現車

（右）忠実に再現されたバイキング火星着陸船

木曾の清流に映える国宝犬山城を筆頭に、歴史的な文化風土に恵まれた犬山市では一九八七年の築城四百五十年を記念に開かれたイベント「キャステイバル犬山」を契機に新しいまちづくり、まちおこしの胎動が一層本格化した。

市民がつくるイベント

このような機運の中、平成六年に犬山市制四十周年記念事業として、初めて市民ミュージカルに取り組むことになった。このねらいは、「市民がつくる市民のためのイベント」というコンセプトで犬山市に伝わる民話や伝説をモチーフにした創作ミュージカルを演じ鑑賞することであり、郷土や舞台芸術に対する市民意識の高揚を図るというものである。私は以前から趣味で演劇活動を行い、また他の町で演劇講座を指導したこともあって、市の依頼を受け、初回から継続して原作と演出を担当させていただいている。

私は、市民ミュージカルのスタンスとして

次の三つに視点を置いている。

成功への3つの視点

一つ目は、素材やテーマが地元に関連しているものであること。二つ目は、主役や脇役といったキャストが地元の素人であること。三つ目は、スタッフやサポート役の裏方がこれまた地元の人であること。この条件を満たして初めて地域の市民ミュージカルが成立すると考えている。

それまで商業演劇以外、地元で市民演劇の発表のなかった犬山市にとっては大変冒険ではあったが、大勢のキャストやスタッフの協力により、初めての市民ミュージカル「古墳」が成功したのであった。

市民ミュージカル「古墳」とは、市内に現存する愛知県で二番目の大きさを誇る前方後円墳「青塚古墳」を舞台に、古代人と現代人に共通する悩みや喜び、悲しみを歌と踊り、芝居でつづる市民参加の創作ミュージカルである。

演劇経験のほとんどない市内の小中学生から六十代の女性まで約六十人は、半年間六十

回の練習を経て、見事に晴れの舞台を千人以上の観客の前で踏むことができたのである。公演最後のフィナーレでは、練習で辛かった涙が感動の涙に変わり、出演者一人ひとりの顔には、満足感と充実感が満ちあふれていた。舞台袖で見守っていた私たちも目頭が熱くなったのを忘れずにはいられないのである。感動と感激の波がステージと観客との間で、渦をまいていくのが肌を通して感じられたのであった。

平成六年に続き八年には、地元の伝説「山姥物語」をモチーフにした「龍神伝説」に取り組んだ。山姥物語をベースに親から子へ、子から孫へといつまでも語り継がれていってほしいという願いをこめて創作したのである。

公募の結果、五十二人の出演者と三十人近くのサポートスタッフにより衣装から小道具まで自らの手で進めていった。この作品は、和風ミュージカルとし

「龍神伝説」より
市民「龍神」パンフレット



古墳、龍神、桃太郎伝説ミュージカル

テーマ・キャスト・裏方を地元密着で



中野金弘

犬山市立東小学校教諭

初めてのミュージカル「古墳」



て企画をしたので、地元の和太鼓グループの特別出演や祭りで使う龍の人形などを登場させ、話題性も出てきた。また地元地域おこしのテレビ番組の取材もあり、関係者一同、大いに盛り上がりつつあったことも追記しておきたい。また、観客アンケートの感想では、構成のうえで現在からタイムスリップして、民話の世界へ、そしてまた現在へとつながるところが分かりやすく楽しく見ることができ

たなど、年代を超えて鑑賞できたことを評価していただけたと思っている。

続いて、十年には「桃太郎伝説」に取り組んだ。郷土の民話の中でも「桃太郎」は日本児童文学の代表的物語として知らない人はいない。桃太郎発祥地は、日本では二十九カ所、中国では一カ所あるといわれているが由来のある地名で一番多いのは、ここ木曽川沿岸一帯である。

犬山市の桃太郎神社のある栗栖の古屋敷か

平成8年度「龍神伝説」



ら、可児市の春里まで家来を引き連れ鬼退治の旅をした伝説も残っている。この作品のストーリーは、民話の桃太郎の原作を残しながらも脚色や創作をしてオリジナルの桃太郎に作り上げていった点が特色である。

この作品では、一般市民の八歳から七十歳まで幅広い参加があり、とくに神主役の市長をはじめ、市職員、婦人会のエキストラを合わせると出演総人数は百人にも及ぶ大作とな

った。演出、振り付け、歌唱指導のもと、五月ごろからおよそ五十回の練習を重ねて本番に臨んだ力作に仕上がっていた。勇敢で行動力のある桃太郎が平和のために悪と闘い、村を救うくだりは、とても感動的で、現世にもこんな「桃太郎」の出現を望みたいという観客の気持ち伝わる作品となったのである。

そして、平成十二年十二月に開催した第四作目の犬山市民ミュージカル「古墳Ⅱ」。

この作品は、青塚古墳が整備され、史跡公

園として誕生した記念に、平成六年に上演した「古墳」の第二弾として取り組んだのである。参加者も小学一年生から大人まで六十人が出演し、スタッフ約三十人も公募で裏方を務め、市民ミュージカルのスタイルもここにきて定着したといえる。

人づくりが基本

さて、まちづくりや地域づくりの基本は、何といっても人づくりであると考ええる。そしてその人づくりの手法に、私は市民ミュージカルの取り組みをぜひ提案したいと思う。

舞台で得た感動は、生涯その人の人生に影響を与え、舞台芸術の向上のみならず、けいこで培った人間関係はよりよい地域の人づくりへと展開していくものと考えられる。地域の素材をうまく生かし、舞台という空間で創造の翼を広げれば、そこにはすばらしいオリジナルの芸術が生まれることは、この犬山市民ミュージカルの取り組みで証明される。

しかし、一方では経費の問題や自主グループの育成などの課題も残る。市民ミュージカルを中心としたまちづくりを進めるためにも、自主グループへの助成や支援が必要不可欠になってくる。継続した事業の展開のために、今後自治体と市民演劇グループが、いかに調整を図ってまちづくりをしていくかが、当面の課題といえよう。

ミステリー⑥鳥取県境港市

境港市は、鳥取県の最北西にある弓ヶ浜半島の先端に位置し、三方が海に面する人口約三万八千人、総面積二十六平方キロの市である。

自然環境はよく白砂青松の渚は秀峰大山と美保湾を背景に風光明媚な景観を呈しており、海水浴、キャンプ、ヨットなど海洋性レジャーでにぎわっている。また日本海最大の漁業基地であり、全国でも有数の水産業のまちでもある。

緑と文化のまちづくり

本市も昭和六十二年以降の行政課題を、従



来の機能性を重視した施策から、市民の「心」を充足させるためのソフト面の施策への切り換えが必要になってきた。そして昭和六十三年に市若手職員十四人からなる「街づくりプ



鬼太郎げた祭り(妖怪神社)

ロジェクト委員会」を発足させ、時代の要求に対応するため行政全般を文化的視点で総点検し、市民参加のもと「緑と文化のまちづくり」を策定し、平成元年を「文化元年」と銘打って新たなまちづくりがスタートした。

平成四年、「緑と文化のまちづくり」の一環として、J R 境港駅から中心商店街にかけての街路を市のシンボルロードとしての整備が始まり、地元商店街、自治会などの代表者

と先進地視察・研究会を開催し、楽しく語らうのできるコミュニティロードとして整備することで地元協議は整い、具体的な計画の策定に取り掛かった。

水木しげるロードの整備

計画の基本的な方針は「本市の特性である海と港とのかかわりを生かした計画」および「その人がもつて文化を生かした計画」に絞り込んだ。情報メディアの発達した現在、やはりその地域を訪れないと受け取れない情報であること、そのまちの感性、現代人が求めている「ふるさと」への思いが表現できること、そして商店街に沿った街路であり地域の活性化を図るうえで効果のあることを考え、妖怪と漫画をテーマにした楽しいロードにすることを決定した。

人が持つ文化を生かすため、現在漫画界の大御所であり、あの「ゲゲゲの鬼太郎」の生みの親であり民族学の研究者、水木しげる先生が境港市の出身であり、さらに平成元年からスタートした「緑と文化のまちづくり」に当初からかかわっていたことと、

「鬼太郎、目玉おやじ」に会える 妖怪と人間と自然の共存がテーマ



黒目友則

株式会社アイズ代表取締役

先生の並々ならぬ郷土思いの気持ちに感銘を受けご協力をいただいた。

しかし、妖怪をテーマにしたまちづくりは全国でも例がなく、空き店舗の目立つ地元商店街では「本当に、妖怪通りになる！」と理解がいただけなかった。しかし、全国展開できる水木先生の知名度と話題性に富んでいること、そして妖怪は子供にとっては空想、大人やお年寄りには昔の思い出の中にあるノスタルジーであり、大人の童話でもあることを地域の方々に理解していただきこの街路を「水木しげるロード」と決定し、平成四年度から八年度にかけて妖怪のブロンズ像八十体を設置した。

まちづくり会社「アイズ」を設立

水木しげるロードが完成し、平成十年四月にこのロードに面する二十五の店舗で構成する「水木しげるロード振興会」を設立し、十一年三月に中小企業活性化事業助成金を受け「水木しげるロード街並整備計画（商店街活性化計画）」を策定した。

さらに十一年十月に、この計画を実現するため水木ロード振興会の有志および市民十八人が集まり「妖怪文化」と「魚文化」をテーマに掲げ、「自分一人ひとりがまちづくりの主役である」「愛を持ってまちづくりをする」「自分の目で確かめながらまちづくりをする」

の三つの「アイ」の集合体を意味する民間会社「株式会社アイズ」を設立した。

アイズの第一段の取り組みとしては、二〇〇〇年一月一日に妖怪の郷の意を込めて「妖怪神社」を建立し、また同時にロードを訪れる人びとの交流の場として「ギャラリー＆手づくり工芸館」もオープンした。

妖怪神社は二十一世紀に向けて妖怪の持つ「癒し」と「精神的なやすらぎ」そして自然環境の保全が叫ばれる現在、「妖怪と人間そして自然との共存」をテーマにしている。

そのため全国から妖怪・精霊が妖怪神社に集まってくる古里の意を込めて八月を「霊在月」と制定し妖怪にかかわるイベントの開催、また十月十日は「目玉おやじ祭り」、十一月十一日は「鬼太郎げた祭り」などの毎月いろいろなイベントを行うなど楽しめるまちづくりを行っている。

現代は、人びとの求めるものが変革しつつあり、日常生活と掛け離れた事象や仕掛けに趣向が変化しており、非日常生活の中での夢を託すことを求めているように思われ

る。まさに、本市が妖怪をテーマとしたことは、時代を捉え斬新でありかつ妖怪の持つ魅力は人びとに郷愁の念とまた現代人が忘れかけていた何かを思い起こさせたかもしれない。

さらに多くの人びとに楽しくそして親しんでいただけるためにも「ロード（線）」から「ランド（面）」へと発展させていく必要がある。

これからわれわれが取り組まなければならないことは、広域的な連携を図り、それぞれの地域に存在する自然と歴史ある文化性のポテンシャルを高め、それらをリンクさせ魅力ある観光ゾーンとして活性化させることではないだろうか。そのためには、水木しげるロードで微力ながら活性化に取り組み始めたばかりではあるが、夢は大きく持ちこの厳しい状況下頑張り続けたいと思っている。



鬼太郎と
目玉おやじの像

総社市は、岡山市と倉敷市に隣接し、中国の広域交通の拠点となっているまち。古代吉備文化の中心として栄えた地域で、古墳と史跡が多い。

「温羅」が復活

古代吉備を語るとき総社市にあるなどの古代朝鮮式山城、「鬼ノ城」^{じょう}抜きでは語れない。今でこそ世界遺産登録の声さえある第一級の貴重な遺跡だが、ついこの間までは一部の地元の人を知っている程度であった。かつてそこに鬼が住み、大和の將軍（大吉備津彦命）に退治された伝承は県内では知られており、これが桃太郎の物語の起源ともいわれている。

垂仁天皇の時代、百済の王子の温羅が空を飛んでこの吉備国にやって来た。温羅は、吉備冠者あるいは火車とも名乗った。身の丈は四尺以上、目はらんらんと輝き、髪は赤く、口から憤怒の炎を吐いたとも言われ、瀬戸内海を行く船を見ればこれを奪い、女をさらったりしたので人はこれを鬼と恐れ、その居城

を鬼ノ城と呼んだ。

そこで大和の数万の兵と戦いとなる。温羅は変化自在で手に負えなかったが、住吉大明神の力を借りた大吉備津彦命に退治される。

その戦いの跡が「血吸川」であり、吉備津神社である。

鬼ノ城たたら倶楽部が発足

鬼ノ城たたら倶楽部はこの鬼ノ城のふもと、阿曾で平成八年三月に発足した。阿曾は中世からは鋳物で栄えた村でもある。

高校までここで育ち、大学からこの地を離れた私は、転勤族として全国をまわったが、いつかは生まれ故郷で人と人をつなぐ活動をしたと考えていた。

そこで転勤先の祭りに積極的に参加し、できれば運営にも加わらせていただいた。ちょうど、平成七年、故郷で祭りをつくる夢が実現できるチャンスが到

来した。

まず「何」で祭りをつくるかを考え、経験もあった演劇や映画祭も検討したが、この田舎ではふさわしくなろうと考え直した。この地の材料を使っ、ここでなければできない、地域の歴史に深く根ざした祭りをつくらうと考えた末の結論が「鬼と鉄」だった。鬼ノ城の鬼と、そのふもとにある日本最古級のたたら遺跡の千引かなる谷製鉄遺跡、そして鋳物鉄との組み合わせだった。古代たたら製鉄を復活させることで地域おこし、祭りおこしにつなげたいと思ったのである。

さっそく島根県横田町在住の「たたら吹き」



砂鉄採取



なな炭作り



たたら炉への砂鉄入れ

鬼とたたら製鉄を組み合わせ祭り

「温羅」伝説を見直し、再発見



林 正実

鬼ノ城たたら倶楽部代表

地元の小学生も参加してのたたら製鉄

倶楽部会員による吉備の酒米「都」の稲刈り



で国選定保存技術保持者の木原明氏にたたら吹き指導を受けつつ、その間、仲間を集めた。

そして平成八年三月、七人の会員で「鬼ノ城たたら倶楽部」を発足させた。現在、幹事会員は四十三人で、その活動は多岐にわたる。「古代たたら操業」のため、まず血吸川の源流で地元の小生や倶楽部の会員、地域の皆

さんと毎年砂鉄を採取している。そのあと、倶楽部の炭窯で小学生や地域の人たちも加わって「たたら炭」を焼く。三日間かけて秘伝

の土で炉を築き、秋の鎮守の祭りにたたらで鉄を造って備中民具の復活も目指している。

平成九年の秋祭りではたたらから玉鋼製作に成功、近くの阿宗神に奉納した。倶楽部では将来、日本刀作りに挑戦、さらに玉鋼を使って一本十二〜三万円はする包丁の販売など、伝統産業を興していきたいと思います。

倶楽部では、鬼の酒造りにも取り組んでいる。

る。九年春、岡山県農業試験場を訪ね、古代から伝わり大正時代に絶えた吉備の酒米「都」の種もみ数百粒を提供いただいた。

西阿曾にある鬼ノ城たたら倶楽部の種もみ栽培田を「都」復活の田と決め、田植え・草取り・稲刈り・はぎに架けて乾燥・千歯こきでの脱穀と、すべて鬼ノ城たたら倶楽部会員の手作業、しかも無農薬で年々増やしてきたのである。

平成十一年、鬼ノ城の真下の棚田で収穫できた六十俵の「都」を持って、倶楽部の会員がやっと見つけた協力酒造会社蔵に入って杜氏の指導で造ったのが鬼ノ城たたら倶楽部の酒「鬼鉄」。私たちの「都」復活と鬼の酒造りの物語は今や全国に知られるところとなった。

平成十二年秋、地域を巻き込み、地域とともにいつか祭りをつくりたいという夢はついに実現した。「阿曾の火祭り」がそれである。火祭りは、岡山県教育委員会・地元小学校・婦人会・コミュニティ協議会などのお年寄りから子供たちまで、地域のすべてを巻き込んだ地域の祭りになった。当日は、飛び込みを含め、親子五十人がテントに泊まり込んだ。鬼とは何かや、鬼と鉄の関係を問うシンポジウムも県内外の講師によって同時開催することができた。

総社市では、桃太郎の鬼退治の原型とされ

る温羅伝説を征服された側、吉備の国の側から鬼を見直し、再発見するイベント活動も盛ん。その代表が、みんなが鬼の面をつけ鬼を慰める「鬼が辻」。また、市民劇団「温羅」が平成十一年以来、鬼をモチーフに公演を行っている。

私たちの今後の活動としては炭窯、たたら炉の横に計画中の陶芸の登り窯建設を柱として地域の人が気軽に楽しめる地域の素材による手作りの工芸村構想がある。

また鬼と鉄を通じて鬼ノ城や吉備の国について学ぶ場としての「鬼ノ城塾」を四月に発足させ、これを母胎として「鬼ノ城学会」にまで発展させたいと考えている。

遊び心で倶楽部活動

しかし私たちは、組織が大きくなり、プロジェクトが増えて全国への発信量が多くなることが地域おこしにおける成功とは決して考えてはいない。鬼ノ城たたら倶楽部は働くお父さんが遊び心を持って地域のために、会員の会費によって活動する会なのである。

お父さんの汗を子供たちに見せること、そしてそれを見る子供たちが元気になることで地域全体が元気になっていく。私たちはその目的や発足の精神を忘れることなく、これからも一歩一歩着実に、地域の皆さんと一緒に歩いていきたいと考えている。

自分の足で歩き、

自分の頭で考えよう

個

性と魅力は二十一世紀のモットーであり、個性豊かで魅力あるふるさとづくりが發展していけば、日本は必ず世界で最も尊敬される国になっていくにちがいない。

今の日本には、困難な問題がいくつもあることはたしかである。これからの三十年ぐらいが勝負である。日本がどんどん落ちぶれていくのか、隆々と發展して、世界中から、さすが日本は大したものと言われるようになるかの境目である。

何から始めたらよいのか分からないとか、問題が多すぎるとか、弱気の意見の人が多い。私はまず自分のことから始めたらよいという意見である。自分の二本の足で立ち、自分の頭で考え、自分で歩き、自分の意見を言い、行動し、自分を少しでも成長させていくことから始めたらよい。皆が、その方向に動きだせば、日本は必ず前に向かって歩き出すことができる。個性豊かで魅力あるふるさとづく

りに取り組むことができる。

百三十年前の明治維新のときも、五十年前の敗戦のときも日本は絶望のふちから立ち上がった。皆が力を合わせて、明るい国をつくった。二十一世紀の今も、三度目の正直で自信と誇りをもって前進すれば、道は開けてくる。

私は今、八十四歳になる。あと五十年は生きて、日本改造のために少しでもお役に立ちたい。六十三歳で司法研修所に入り、二年間学習して、六十五歳で国家試験を受け、東京青山に法律事務所を開いた。七十五歳で、ビユーティフル・エージング協会をつくり、高齢者が自分で明るく生きる運動を始めた。高齢者が暗い顔をして、愚痴と不安ばかり言っている社会は發展できない。高齢者が自己改造をし、成長を心がけて努力する日本をつくりたい。何とか、健康な身体をつくり、少しでも成長して、若い人たちと一緒に、明るい地域づくりのお手伝いをしたい。まず自分か

ら始める気持ちが必要である。

アメリカには百歳以上の人が六万人いる。日本は一万五千人までいかない。人口はアメリカの半分だから、百歳以上の人を三万人までに増やしたい。それは若いときから、明るく自信をもって人生を生き続け、自分の足と頭で生きる人生観を持ち、それを実行することが必要である。

少子化は避けられないと主張する人が多いが、それには賛成できない。それでは日本はやがて衰弱してしまう。若い人たちはぜひ二人か三人の子供を産んで、強く明るく育ててください。出産、育児、教育がしやすいように皆で力を合わせて、制度を改革し、日本の体制を改めていきましょう。

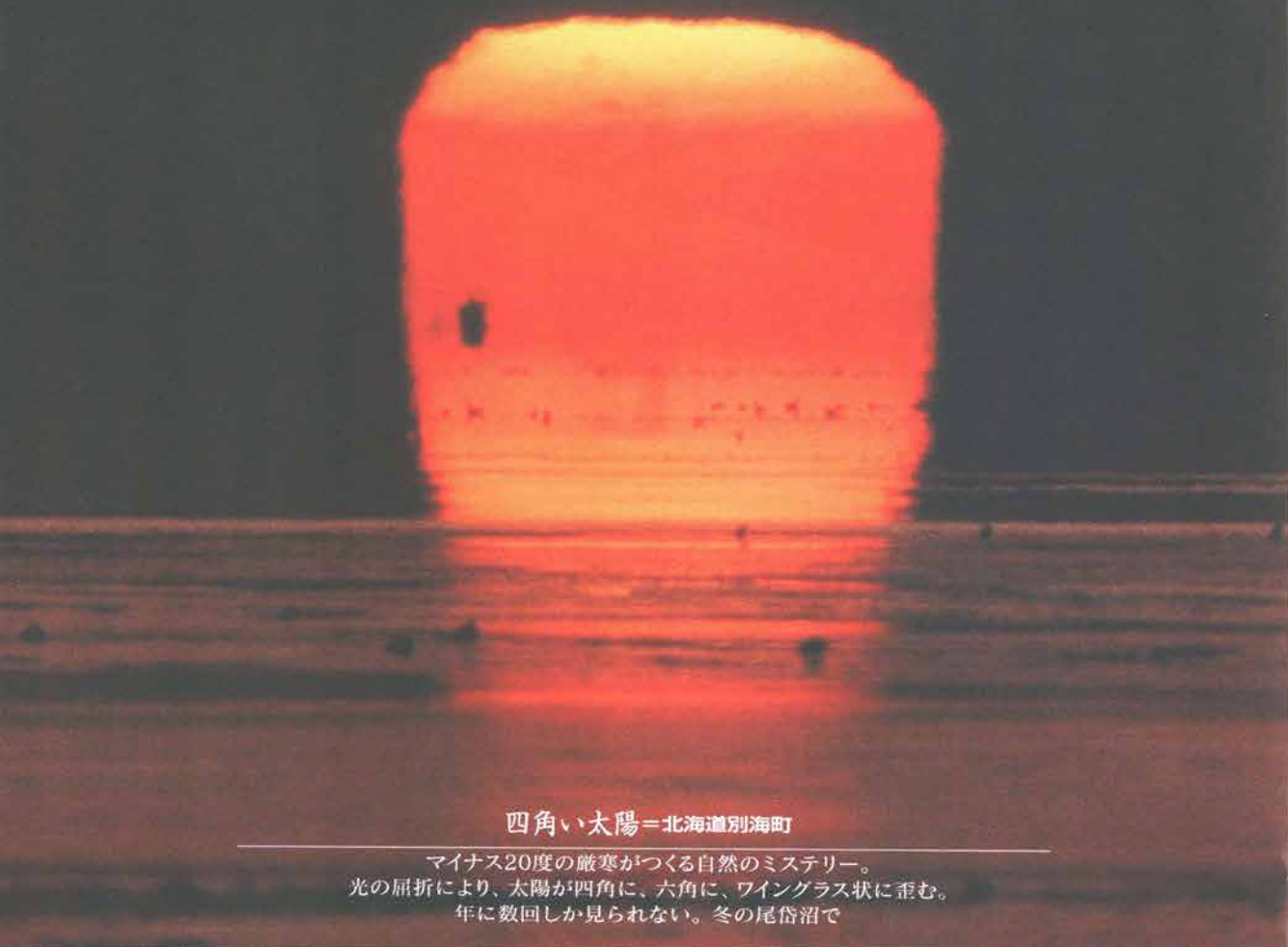
愚痴を言わない高齢者、明るい子供、少年の笑い声のあふれる日本、明るいふるさとづくりの進んでいく日本をつくりましょう。

渡辺弥栄司

ビユーティフルエージング協会会長

column





四角い太陽＝北海道別海町

マイナス20度の厳寒がつくる自然のミステリー。
光の屈折により、太陽が四角に、六角に、ワイングラス状に歪む。
年に数回しか見られない。冬の尾岱沼で



河童伝説 宮城県色麻町

河童伝説の本家本元を自認するのが色麻町。千二百年余続く磯良神社（通称おかっぱ様）には全国で唯一、木彫りの河童のこ神体があり、歴代宮司の姓は「川童」さん



手児奈伝説 千葉県市川市

「万葉集」に伝説の美人と歌われ、男たちが自分を手に入れようと争うのを悲しむ真間の入江に身を投げた手児奈。市はその象徴である手児奈を基に、文学など文化都市づくりを進める



岩戸投げコンテスト 長野県戸隠村

戸隠山は天照大神が隠れた「天の岩戸」の岩戸を田力男衆が投げ捨ててきた山という。これにちなみ、岩戸に見立てた岩を投げて距離を争う。天の岩戸伝説の残る宮崎県高千穂町でも、同じ時刻に岩投げ競争が行われる



かぐや姫まつり 奈良県広陵町

『竹取物語』の竹取の翁の名は讀岐造。広陵町には讀岐神社があり、これにちなんでかぐや姫まつりの各種イベントが行われる



裸まいり 宮崎県

兄の釣り針を失った山幸彦は宮崎県青島沖にあつたとされる綿津見大神の宮で豊玉姫と楽しく暮らす。三年後戻ってきた一人を村人が海に飛び込んで迎えた故事にちなんだ祭り



ちんこんかん踊り 広島県三原市

八月の例祭日に牛神社（天須賀神社）に奉納される破魔弓をもちた鬼の踊り。牛神社は死んだ牛をまつるため建てられたと伝わるが次第に雨乞いや虫除けのための踊りを奉納するようになった





鳩(ぬえ)ばらい祭り＝静岡県伊豆長岡町

800年ほど前、源頼政が射止めたという頭は猿、胴は虎、尾は蛇という妖怪「ぬえ」。
 新年に厄払い行事である「鳩ばらい祭り」が催され、
 最後、鳩に芸者が豆を投げ、頼政がトドメを刺す

尚武の国ならではの地域づくり

熊 本は古くから武道が盛んであり、尚武の国として知られています。

剣道では、剣豪宮本武蔵がその晩年を過ごしたのが熊本であり、現在も全日本選手権の覇者をはじめ多くのつわものがあります。柔道でも、戦前戦後の全日本選手権を制し不世出の天才といわれた木村政彦、そして、全日本選手権九連覇の山下泰裕も熊本の出身です。

このように武道の盛んなお国柄を反映してか、街角を歩くと、武道具専門店が目につき、私の住む熊本市水前寺界限だけでも、徒歩の範囲で三軒の店があります。夕方ともなると、武道場に通うけいこ着姿の小学生たちをよく見かけるのも熊本ならではのものです。

現在、生涯スポーツ、あるいは、欧米のように地域に根付いたクラブスポーツの振興の必要性がよく指摘されていますが、それぞれの地域における武道館や体育館において展開されている武道は、ある意味では、わが国の伝統的なクラブスポーツ（武道）といっているものではないと考えています。

私も、熊本勤務を始めてから剣道にとりつかれ、約十年になりますが、男女を問わず小学生から六十歳を超える方々までが、師範を

中心に厳しいけいこを行い、たまには花見や昇段祝いの懇親会をするという世代を超えた地域での集まりにすっかりはまっています。

そして、このような活動を地域づくりに活用している例も見られます。宮崎県と接する球磨郡錦町は、平成二年から剣豪「丸目蔵人」の生誕四百五十周年を記念した全日本選抜剣道七段選手権大会を開催しています。全国で唯一の七段戦であるこの大会は、「剣豪とフルーツの里」錦町の地域づくりの中心事業となっていました。

また、熊本市では、平成九年から「剣聖宮本武蔵顕彰全国小・中学生剣道大会」が開催されており、十二年度の大会には、北は新潟から南は沖縄までの二十一府県二百七十七チームが参加しました。

平成十一年度には、熊本県で第五十四回国民体育大会が開催されましたが、剣道における総合優勝を記念して、剣道競技の開催市となった菊池市で、十二年度から、「熊本県剣道連盟会長旗争奪剣道大会」が開催されることとなりました。この大会の特筆すべき点の一つは、郡市単位の剣道連盟で参加し、勝負は一本勝負、そして、必ず、社会人の初段同

士の対戦が組まれることです。出場者によっては試合が初体験という社会人初段同士の戦いはそれはそれで緊張感にあふれる見ごたえのあるものとなっています。

このように、熊本では、武道は個人の道として求められるのみではなく、地域のネットワークづくりや活性化という副次的な効果をもたらすものとなっています。

筆者が学生時代から所属する明治神宮武道場至誠館も、小学生から社会人まで、鹿島神流、合気道、剣道、柔道、弓道ができる総合武道場であり、地域スポーツの一つの核となつていますが、熊本では、それがさらに、地域を支えるものとなっているという実感を受けています。

やはり、宮本武蔵や丸目蔵人以来の本物の武芸者の歴史が現在まで連綿として続いているということでしょうか。地域に根ざす武道が、地域における人びとの健康の向上、人的なつながりの強化などのさまざまな効果を自覚させられつつけいこに通う今日このごろです。

column



黒田武一郎
熊本県副知事

東祖谷山村は、四国中央部、徳島県の西南端に位置し、日本三大秘境の一つに数えられており、剣山を始めとする三嶺、塔の丸、寒峰の山々や祖谷溪谷のほか、多くの原生林など未開拓の大自然に囲まれている。

落人の道をたどる旅

わが村には平家落人伝説があり、平教盛の次男である越後の守・国盛が源平屋島の合戦に敗れた後、安徳天皇を奉じて村内大枝の地に至り、そのあと阿佐に移りこの地を支配したと言伝えられている。村内には安徳天皇の御火葬場跡、阿佐平家屋敷、平家の赤旗、鉾杉とも呼ばれる国盛杉、剣山山頂付近の平家の馬場などの遺跡が数多く残っている。

この大自然と落人伝説を活用し、さまざまな案としてイベントを行っているが、代表的なものを二件ほど紹介したい。

源氏の子孫も参加

その一つが「平家落人の道をたどる旅」。

今年で十二回目となるこのイベントは、平家伝説のとおり、讃岐屋島で源平の戦いに敗れた平家一門が、難航、苦行の末、祖谷山へ落ち延びてきた道のりをたどり、豊かな歴史や自然を体験していただくとともに、都会からの参加者および平家伝説につながりのある香川県塩江町「藤澤会」との交流を図る目的で行っている。

出発は香川県屋島神社。まずはバスで塩江町へ向かって走り出す。バスの中では、郷土史家森本徳氏が「平家伝説」について詳しく説明してくれる。山の細い道を通り、峠に差し掛かったところ、窓から見える屋島はミニチュアの町のように。ちょうどお昼、塩江町に到着。そこでは藤澤会の方が、塩江名物「打ち込みうどん」を作ってくださり、お腹いっぱいごちそうになる。

「藤澤会」とは源氏の子孫で、屋島から落ち延びてきた平氏を、冷たくあしらったと言われているおり、藤澤会会長によると「皆さんをもてなして罪を償いたい」とのこと、この交流が始まったそうだ。

塩江町を経て徳島県的美馬町から三加茂町

まで幾つもの町を通り抜け、東祖谷山村深淵へ向かって走る。道は狭く舗装されていない場所もたくさんあるが、落人たちが通ったときはこんなものではなかったはずだ。道なき道をかき分け、逃げるようにこの祖谷山の地に入ったのだから……。

到着したら別のスタッフが夕食の準備をして出迎えてくれる。自己紹介の後、食事が始まり夜遅くまで楽しい話で盛り上がる。初めて会った者同士とは思えないほどみんな溶け込むのだ。

翌日、起床は午前六時だが、今日は山を歩くとあってみんな早起きだ。近くを散策したり、朝もやをカメラに収めたり、また、太極拳で身体をほぐしている人もいる。

午前八時出発、平家落人たちがたどったであろう道を、今度は自分たちの足で体験してもらう。深淵から落合峠、寒峰を経て、大枝



平家落人の道をたどる旅の最終完走者

平家の子孫誇りに「大イベント」 落人伝説講談劇、そば祭で盛り上げ



小林三喜代

東祖谷山村企画振興課主事

まで降りてくる。時間にして約八時間ほどである。参加者の中には経験豊富な方がいる一方で、初めてという方もいる。二、三人に一人の割合でスタッフが付く。あらかじめ登山道の草を刈って道を作り、ケガのないよう安全に気を配る。

やっとの思いで大枝へ到着。みんなの顔が紅潮し、疲労が隠せない様子だ。その後は武家屋敷喜多家にていろりを開んでの歓迎会が待っている。地元の方々との楽しい話らいと交流。参加者の面々は、完走した満足感で嬉しそうである。スタッフもこのときは大いに盛り上がる。口々に「また参加するからね」という言葉を聞くと、このイベントが、この先十年、二十年続くに違いないと確信できる。

祖谷平家まつり

もう一つが「祖谷平家まつり」。

十年前、地元の人でも忘れがちな伝説を若者に伝え残したいとの思いにより、むらおこしの一環として「祖谷平家まつり」を開催した。二回ほどで中止となっていたが、平成十一年度、七年ぶりに装いを新たに復活した。

内容は、そば祭りとして、祖谷そばを千六百食用意、いろいろなバザーがあり会場はいつもいっぱいである。前夜祭の芸能の夕べでは、御陣乗太鼓、津軽三味線、民謡ショーなど、また、地元の祖谷衆太鼓、童衆の演奏や

祖谷平家まつりの武者行列と伝説講談劇61人の出演者



祖谷の里歌踊りなど、盛りだくさんである。祖谷の粉引き節日本一大会は出場者が多く上手な方が多いため、プロの審査員の悩みでもあるとのことだ。そしてメインの武者行列と平家落人伝説講談劇。この祭りの花形ともいえる「ミス春姫」が一般公募で選ばれる。平国盛・安徳帝・建礼門院をはじめとする平氏や女官たち、総勢六十一人が衣装を身にまとい、約一*の道のりを歴史絵巻のような華やかさでかつ、堂々たる振る舞いで武者行列を行う。このときばかりは時代をタイムスリップした気分にはせられる。

次に平家落人伝説講談劇が始まる。武者行列をした役者たちが、今度は講談劇に挑戦するのだ。監督の二瓶長記氏と名講談師一龍斎貞心氏の指導のもと、たった一日半の練習でも見事な出来栄である。建礼門院の自害、十二歳という幼い安徳帝の死、春姫の愛する人を追っての旅そして落命、幾度となく涙を誘われる。この講談劇を見ていただくと平家落人伝説がだいたい分かるようになっていく。観衆約二千五百人、まだ「祖谷平家まつり」が定着したとは言いきれない。もっともっとPRして多くの方に東祖谷山村の歴史を知ってもらいたい。また、このまつりを通じて村民皆さんに、私たちが平家の子孫であることを誇りに思い、ずっと東祖谷山村を愛してもらいたい。

上位を占めるまでになっており、平成十一年三月には町の水産研究センターが完成し、海

の環境変化を集中的に調査・分析し、町と水産関係者が一体となり、品質の高い養殖魚を育てることを目指している。

国内最大級の恐竜化石

御所浦町には中世代白亜紀中ごろから古第三紀（一億年～四千五百万年）までの堆積層が分布しており、貝類化石が豊富に産出することで世界的にも

知られ、その特異な堆積層は化石とともに古くから著名な地質学者・古生物学者の研究対象となっていた。

平成九年、国内最大級の肉食恐竜や大型草食恐竜の化石が発見され、豊富な脊椎動物化石が産出することが明らかになり、そこで化石の発掘と化石が語るものを整理・収集し白亜紀資料館やアンモナイト館、化石公園などを整備し、島全体を博物館に見立てた「全島博物館構想」を推進してきた。とくに資料館に隣接する化石発掘場は、訪れた子供たちや

家族連れには大変、好評を得ている。

離島に1日2千人の入場者

平成十年九月、熊本県の小さな島にモンゴルでは国宝級の化石を含む大変貴重な化石十数点がやってきた。この化石を受け入れる町当局をはじめ、担当する職員は不安を抱えながらも「モンゴル恐竜化石特別展」と題した、町はじまって以来の二カ月間にわたるビッグイベントをスタート。

「たくさんのお客が船に乗り、島に渡ってくる」このことだけを信じ、不慣れな口調で観光客の対応に追われる日々が続いた。期間中半ばに思いもよらない成果を挙げ、後半の平日にはチャーター船で乗り込む学校の子供たち、週末は家族連れで狭い会場はにぎわいを見せ、一時期、「島が沈みそう」といわ

化石採集



恐竜化石で探究・学習するまち

「全島博物館構想」を推進



森 数安

御所浦町企画観光課企画係長



れるぐらいに一日二千人近い入場者のときもあり、期間中二万人を超える観光客が島を訪れた。

この取り組みは、地域住民はもちろん、対外的にも「恐竜の島」としてアピールすることができ、水産の島と並ぶもう一つの顔づくりとしてステップアップすることができた。

「三度の飯より化石が好き」という福岡県と京都府出身の二人の青年が、資料館の運営を担っている。彼らが、町の恐竜化石を発見し、現在もたくさんさんの恐竜化石を発掘・研究している町の化石博士である。

しかし、化石セミナーや来客者の対応に追われる毎日、彼らが発掘・収集した化石は倉庫に山積み状態で、専門とする化石の研究に集中する時間が取れない状態にある。そこで、町では平成十二年に資料館が属する施設内に文化企画室を設置し、町の観光係との連携により受け入れの態勢を強化することになった。

近く本土と架橋

これまで、これらの特異な資源を活用した取り組みは、確実に島への観光客入込客を増やし、「恐竜の島」として対外的にアピールすることができた。また、「全島博物館構想」におけるイベントや体験メニュー（化石セミナー・化石の発掘・レブリカづくりなど）に訪れる観光客を対象に、町内の海上タクシー

など海上運送業関係者は島の周遊コースを設定し案内を始め、漁船漁業者の一部は観光漁業を始めるなど、さまざまな形で「体験」という要素が連動し、島が持つ特異な資源を生かした体験の島として形成されつつある。

さて、「これからどうしよう」ということになるが、今年はこれらの「体験」を求めて、初めての修学旅行生がこの島にやってくる。島の「体験」を十分に満喫してもらい、思い



化石セミナー

出に残る修学旅行となるために、関係者とともに一緒になって「もてなしたい」と考えている。今後は、ますます「島ならではのもの」が要求されるのは確実であり、受け入れ態勢の充実と地域住民がこれらにいかにかかわりをもっていくかがポイントになると思う。

この夏、七月二十日から四十日間、ティラノザウルスの恐竜全身骨格のレブリカをはじめ、たくさんさんの化石を展示する「大恐竜in御所浦」が島で開催される。また、暑い夏になりそうである。そして、体験を求め島にやってくる観光客や修学旅行生を島に受け入れるために「アイランドツーリズム推進協議会」を発足したいと考えている。いろいろな問題点が予想されるが、組織の理想像として「やる気のある若者が動き、そして、それを応援する行政と地域の人びと」。しっかりと根強い組織として育てていきたいと思っている。

近い将来、私たちの島は架橋により本土とつながろうとしている。目まぐるしく変わる島の状況に対応しながらも、島が持つ特異な自然と情緒は大切に残していかなければならない。高齢化と少子化現象はとどまることなく進行するのは確実であるが、島に残る私たちをはじめ、若い世代はこの状況を確実に受け止め、担っていかなければならないと考えている。

地域情報交流拠点施設整備 モデル事業について

1 はじめに

過疎地域については、平成十二年三月に議員立法により「過疎地域自立促進特別措置法」が制定され、これにより各般の特別措置が同年四月一日以降十年間にわたって講じられることとされた。

同法は、その目的に地域の自立促進を掲げ、地域格差の是正はもとより、美しく風格ある国土の形成に寄与することが新たな目的に加えられるとともに、過疎対策事業債の対象施設の拡大、財政投融資の対象地域の拡大、税制特例措置の対象事業の拡大、地方税の課税免除・不均一課税に伴う地方交付税の減収補てん措置の対象事業の拡大、総務省所管補助事業の対象事業の拡大などの特別措置の拡充が行われている。

本稿では、とくに総務省所管の過

疎対策関係補助事業のうち「地域情報交流拠点施設整備モデル事業」について紹介したい。

2 地域情報交流拠点施設整備モデル事業

地域情報交流拠点施設整備モデル事業は、平成七年度の第二次補正予算から創設されたものであり、制度の概要は次のとおりである。

(1) 制度の趣旨

過疎地域および中山間地域において、総合的生活関連情報や産業・文化情報を効果的に収集・提供することによって、新たな連帯・連携意識の醸成、地域資源を活用した新たな産業の振興および情報による地域間交流の推進などを展開するための事業に対する補助であり、予算の範囲内において交付するものである。

(2) 補助事業者

補助金の交付の対象となる事業を

行う者は、過疎地域自立促進特別措置法第二条第二項の規定により公示された市町村、特定農山村地域における農林業などの活性化のための基盤整備の促進に関する法律第二条第四項の規定により公示された市町村並びにこれらの市町村により構成されている一部事務組合および広域連合である。

(3) 補助対象となる事業

補助金の交付の対象となる事業は、情報交流のために拠点施設の整備（改修を含む）を行うものであつて、次に掲げる要件を満たす事業である。

① C A T V やパソコン通信などの情報メディアの拠点機能を有する施設を整備するものであること。

② 生活関連情報や産業情報などの受発信を行い、情報による地域間交流を推進するための施設を整備すること。

③ 生活の利便性の向上や産業の振興

を図るための施設を整備するものであること。

(4) 補助事業に要する経費

地域情報交流拠点施設整備モデル事業は、整備される施設の区分により A タイプと B タイプとの二つに分けられる。A タイプは C A T V 施設整備型、B タイプはパソコン施設整備型であり、補助対象となる経費の内容はそれぞれ次の施設の整備（改修を含む）に要する経費とされている。

＜A タイプ＞ C A T V 施設整備型

① C A T V 放送施設

② スタジオ施設

③ 映像ライブラリー施設

④ その他必要な施設

＜B タイプ＞ パソコン施設整備型

① パソコン通信拠点施設

② 研修施設

③ 情報ライブラリー施設

④ その他必要な施設

地域情報交流拠点施設整備モデル事業の採択状況 ※○内のアルファベットはタイプを示す

▼7年度

長野県
北御牧村

- 災害時の告知放送やコミュニティ醸成の手段となる有線放送電話の設置
- 在宅高齢者、要介護老人世帯などに対する在宅健康管理システム
- 地域の行事や趣味講座、生涯教育などの自主放送
- 若年層を中心に高い関心を集めるCS・BS放送

福島県
西会津町

- 在宅高齢者、要介護老人世帯などに対する在宅健康管理システム
- 学校教育への活用
- 地域おこしグループなどの活動成果を中心とした自主放送番組
- 難視聴地域の解消

鹿児島県
加世田市

- 地域情報の提供の場、市民交流の場としての情報ライブラリー
- 教育情報ネットを構築することにより、各小中学校の交流や生涯教育の振興を図る
- 市民のパソコンに対する意識の高揚などを図るために情報研修室を設置
- 外部情報ネットワークを産業などに活用するための開放オフィスを設置

富山県
山田村

- 従来から実施している山・海・都市との交流を中心に交流ネットワークを構築
- 村民のパソコンに対する意識の高揚を図るために情報研修室を設置
- 山田村を映像で紹介する情報表示システムの設置
- 外部情報ネットワークを産業などに活用するための開放オフィスを設置

▼8年度

長野県
阿南町

- 地域行事や学校行事などの身近な話題、生涯学習講座など地域コミュニティを高めるための自主放送
- 難視聴解消のためのTV放送およびFM放送の再送信
- 要介護老人、独居老人など高齢者に対する在宅健康管理

高知県
田野町

- 地域情報支援システムと高齢者総合支援システムを大きな柱とし、地域情報の共有化、介護公社との連携による支援などにより、地域の情報化を推進する

▼9年度

島根県
赤来町

- 双方向通信機能を備えたCATV放送局と光ファイバーケーブルを整備し、CATVの教育や福祉への活用を図るとともに、インターネットへの接続を行う

鹿児島県
垂水市

- パソコン通信の拠点施設を整備するとともに、地域住民同士あるいはインターネットを活用した他の地域との情報交換、各種行政情報の提供などを総合的に進めるシステムを構築する

▼10年度

大分県
鶴見町

- CATV施設を整備することにより、自主放送による行政情報・地域情報の提供、町診療所・保健センターを核とした福祉医療の充実、農業者・漁業者に対する気象情報の提供、災害など緊急時における連絡体制の確立、難視聴の解消、多チャンネル化による情報アクセス機会の増大などを図る

新潟県
中郷村

- パソコン通信の拠点施設を整備するとともに、ライフスタイルに応じた情報端末の整備を行い、保健・福祉などの充実を図るとともに、インターネットを活用した他地域との交流の拡大を促進する。

▼11年度

大分県
米津村

- CATV放送センターなどを整備することにより、自主放送による行政情報・地域情報の提供、村営診療所を核とした福祉医療の充実、災害など緊急時における連絡体制の確立、難視聴解消・多チャンネル化による情報アクセス機会の増大などを図る

▼12年度

長野県
美麻村

- 村民に総合的な生活関連情報を提供し、パソコンなどを生かした情報機器の体験学習を可能とする拠点施設を整備するとともに、情報センターから各家庭に向けての自主放送の実施、行政情報、防災情報、医療福祉情報などの双方向利用を可能とするためのネットワークの整備を行う
- また、国際姉妹村とのホームステイなど国際交流活動にも併せて活用する

※いずれのタイプにあっても、土地の取得造成費および庁舎など公用に供する施設に係る経費は除く。
これらの経費については、一市町村当たりの補助対象経費の限度額（上限額および下限額）が次のとおり

り定められている。なお、一部事務組合や広域連合が行う広域事業はAタイプのみを補助対象とし、限度額が別に定められている。
（Aタイプ）限度額
上限 四億七、三三三万円

下 限 三億四、〇〇〇万円
※広域事業の場合の限度額
上限 六億四、三七一萬六千円
下 限 四億二、〇〇〇万円
（Bタイプ）限度額
上限 一億七、〇五八萬六千円

下 限 八、〇〇〇万円
なお、Bタイプに係る補助対象経費には、パソコン通信に係るホスト・コンピュータ（インターネット・サーバーなど）のほか、各家庭に貸与するパソコン端末などであつ



(上)鹿児島県垂水市「住民の情報交換の場」キャラメル垂水・ふれあいコーナー
(下)新潟県中郷村「中郷村情報交流センター」における村民パソコン研修



でも地域ネットワーク・システムとして一体性が担保されていれば、パソコン通信拠点施設に含めて補助対象とすることができ、補助事業として地域住民も含めた情報通信ネットワークの構築が可能となるものである。

また、システム企画・開発費などソフト経費についてもハード整備の一環として必要とされるものであれば、その他必要な施設の範囲に含めて補助対象とすることができ、過疎地域市町村などの情報化のニーズに幅広く対応できるものとなっている。

る。

(5) 補助率、補助金額など

情報交流拠点施設整備モデル事業の補助率は、補助対象経費の三分の一以内である。したがって、たとえば補助対象経費を前述の上限額とした場合、補助率三分の一で補助金額を算定すると、その補助金額は、
〈Aタイプ〉一億五、七七二万円
〈Bタイプ〉五、六八六万二千元となる。

(6) 事業実施期間

補助対象となる事業の実施期間は二カ年度以内である。

3 地域情報交流拠点施設整備モデル事業の過去の補助採択の状況

平成七年度から平成十二年度までの補助採択の状況は別表(前ページ)のとおりである。

4 平成十三年予算額と事業採択の見込み

地域情報交流拠点施設整備モデル事業に係る平成十三年予算額は二億一千四百五十七万二千元を計上しており、補助事業の採択要望については、現在、各都道府県を通じて照会中である。

過疎地域自立促進特別措置法第三条には過疎地域自立促進のための「対策の目標」が掲げられているが、ここに旧過疎法にない新たな目標として、「起業の促進」、「美しい景観の整備、地域文化の振興等を図ることにより、個性豊かな地域社会を形成すること」とともに「過疎地域における情報化を図り、及び地域間交流を促進すること」が加えられている。

高度情報化を迎えている今日、過疎地域市町村などにおいてもCATV、パソコン・ネットワークなどを活用した地域情報ネットワークを構築し、豊かな自然や伝統文化といった地域資源に恵まれた過疎地域ならではのすばらしさを内外へ発信することや、総合的な生活関連情報や産業・文化情報の受発信を行うこと、従来は障壁となっていたであろう立地による距離や時間といったものを全く気にする必要のない情報による地域間交流の推進を図ることは、過疎地域の自立促進には非常に有効な手段であると考ええる。

地域の創意工夫により、本制度の積極的な活用が図られることを期待して本稿のむすびとしたい。

寄稿

創立五十周年と

電力自由化



一昨年の秋、社長に就任し、在任中に会社創立五十周年を迎えることになった。この五十年間私の年齢は約五・五倍になったが、当社の販売電力量は約二十三倍となった。販売電力量の伸びはとりもなおさず道民の生活・文化の向上および北海道の産業の発展を表すものであり、誠に感慨深いものがある。

この機会に、北海道の電気の歴史を概観すると、道内に初めて電気の灯りが点ったのは明治二十二年、北海道製麻会社の札幌工場内である。ただし、これは工場照明用の自家用設備であり、現在当社が行っているような一般供給については明治二十四年十月に札幌市大通西三丁目に開業した札幌電燈舎をもってこう矢となす。この会社は、地元の実業家、後藤半七氏の興したもので、わが国初の電気事業会社である東京電燈に遅れることわずか五年の開業であることを思えば、今でいうベンチャー企業の位置づけにあったかと想像される。文献によれば、札幌電燈社は二十五キロワットのエンジン式直流発電機二台を備え、札幌中心部の北海道庁など三十戸ほどの顧客に電気を販売していたが、電灯の明るさは今でいう十ワットほどで、しかも不安定で低い電圧であったため「光滅常ならず」であったという。

その後、明治後半から大正末期にかけて道内でも次々と電灯会社が設立され、最盛期には約七十社が群雄割拠するに至り、市場原理の支配の下、顧客の争奪、離合集散を繰り返すに過ぎず、戦争を契機とする電力国家管理の一時期を経て、昭和二



南山英雄 北海道電力株式会社取締役社長

十六年五月一日、北海道電力株が創立されたのである。当社設立当時の最重要課題は、戦後の復興に伴う電力需要増への対応であったが、節電の呼びかけを行うとともに、突貫工事による電源開発で供給力確保に全力を挙げて取り組み、そのかいあって昭和二十八年には全国に先駆けて電力制限を解消することができた。

昭和三十年代以降は、高度成長を反映し高い伸びを続ける需要に対応するための水力・石炭火力を中心とする電源開発、それまで当社の供給範囲外であった農村部などの自家用設備の引き取り、二度にわたるオイルショック、原子力発電・海外炭火力の建設などさまざまな課題をクリアして、今日北海道の電気料金は全国的にも安いほうに数えられる水準を達成することができた。

一般に企業の寿命は三十年と言われる中、当社はいわば一回り目を過ぎて二回り目の後半に差し掛かっているわけである。そして、創立五十周年を迎える今、電気事業を取り巻く環境は、電力小売りの部分自由化という歴史的転換期を迎えている。二十世紀の電気事業は、これまでの五十年間の取り組みの継続だけでは生き残っていけない、新しい時代の到来である。先述のように電気事業の発祥が大いなる企業家精神に裏打ちされた、いわばベンチャー事業であったことに思いをいたし、「電気を通じて北海道のお役に立つことが当社の存在意義である」との基本を忘れず、今後とも果敢にチャレンジしつづけてまいりたい。

財団法人地域活性化センターが実施している「全国地域リーダー養成塾」の平成十三年度の開講式が、五月九日、東京の銀座ラフィナートで三十六人の新塾生を迎えて行われた。

全国地域リーダー養成塾は、地域づくりの核となる人材の育成を目的に平成元年度から開講、卒業した三百五十五人のリーダーが既に全国で活躍している。

塾生は、県、市町村、地域づくり団体、商工会など多種多様な団体から参加している。

開講式では、まず同センターの吉田弘正理事長が、「地方分権法が施行され、地方が中心となって自己決定、自己責任による地域の運営システムの確立が求められる時代が本格的に到来しつつある。わが国が持続的に発展していくためには、確実に分権体制を進展させていかなければならず、また、今後、地域づくりの核となるリーダーの重要性はますます大きくなっていくと考えられる。入塾を機に、広い視野、卓越した想像力を持ち、積極的に困難を解決できるリーダーになって欲しい」と挨拶した。

ついで、講師陣を代表して大森彌

平成十三年全国地域リーダー養成塾開講式 第十三期生36人が入塾

塾長(千葉大学教授)が、「塾とは学校と異なり、教える側と教わる側が互いに高め合うもの。四人の主任講師のご助言、指導をいただきながら塾生同士大いに研鑽し、よい意味で従来の殻を破るような地域のリーダーになつて欲しい」と訓辞した。

このあと総務省の林省吾大臣官房総括審議官が、「全国各地で、活発なまちづくり、むらおこしが展開されているが、地域づくりは人づくりであり、指導力のあるリーダーの存在は不可欠である。リ



ーダー塾の盛りだくさんのカリキュラムを生かし、これまで卒業した三百五十五人の先輩に負けないような、地域社会を引っ張っていきけるリーダーとなるよう期待している」と激励した。

最後に塾生を代表して、財団法人岡山県市町村振興協会の佐々木正俊さんが「入塾を機に、地元の町を見つめ直すとともに、理論、実践面を深く追求して大きく飛躍したい。講師の先生方から、さまざまな知識をいただくとともに、塾生同士の交流から生まれる新たな情報、人脈を生かし、活力ある地域づくりに努力してまいります」と決意の言葉を述べて開講式を終了した。

引き続き会場を移し、懇親会が開催され、塾生派遣元代表の紹介、挨拶で大いに盛り上がりとともに、塾生同士の会話がはずみ、これから始まる塾の期待感が膨らんだ。

午後から第一回集合研修のカリキュラムに入った。今後は、平成十四年二月まで計七回の集合研修と海外研修、市町村実務研修など充実した内容のメニューが塾生を待っている。

(財)地域活性化センター研修交流課
副参事 曾田智生

●講師陣 塾長＝大森彌(千葉大学教授)

主任講師＝卯月盛夫(早稲田大学教授)／北沢猛(東京大学大学院助教授)

小田切徳美(東京大学大学院助教授)／辻琢也(政策研究大学院大学助教授)

塾 生 プ ロ フ ィ ー ル

北海道二七〇町
青森県南部町
山形県小国町
茨城県笠間市
群馬県高崎市
埼玉県小鹿野町
千葉県千葉市
神奈川県横須賀市
神奈川県小田原市
新潟県上越市
新潟県松之山町
長野県飯田市
長野県望月町
岐阜県多治見市
岐阜県白川町
岐阜県古川町
岐阜県高根村
静岡県清水町
愛知県下山村
兵庫県宝塚市
兵庫県篠山市
奈良県天川村
和歌山県高野口町
和歌山県高野口町
岡山県岡山市
岡山県船穂町
岡山県落合町
岡山県美作町
広島県呉市
山口県山口市
高知県高知市
高知県高知市
福岡県宮田町
佐賀県西有田町
長崎県諫早市
鹿児島県大口市

加藤紀孝 相田一夫 二馬健 加藤忠 新井直樹 高橋俊行 角田勝美 小座野信吾 早川潔 串橋祥子 高橋広助 今村和男 清水宣子 若林雅文 安江章 清水貢 奥原康夫 杉山滋 長坂哲夫 森田国治 小晶理三 畠中稔 池之内正行 西川一雄 佐々木正俊 藤澤直武 桐山博行 石橋昌弘 宮下新吾 山本恭子 細木邦郎 森本泰成 尾藤康弘 岩永枝信 山下浩信 瀨崎昭二

ニセコ町企画環境課
八戸地域広域市町村圏事務組合総務課
小国町企画課
駒笠間市開発公社
ブルーノ・タウトの映像を作る会
小鹿野町まちづくり政策課
千葉市稲毛区地域振興課
横須賀市市民生活課
小田原市企画政策課
上越市地球環境課
松之山町振興課
飯田市工業課
協西えいこの会
多治見市教育委員会生涯学習課
白川町総務課
木の国ふるさとづくりの会
高根村産業振興課
清水町企画財政課
下山村経済課
宝塚市介護保険課
篠山市まちづくり推進課
天川村企画財政課
高野口町産業課
高野口町商工会
福岡山県市町村振興協会
船穂町産業課
落合町建設課
美作町総務課
呉市人事課
山口県環境生活部県民生活課
高知県地域政策室
高知市まちづくり推進課
宮田町企画財政課
西有田町企画政策課
諫早市河川課
大口市水道課

町民講座、まちづくり懇談会への積極的参加、二五「町まちづくり基本条例」の策定に携わる農業青年育成の「アグリビジネス南部塾」の設立に尽力、各種イベントに積極的に参加。集落活動の担い手として意欲的に携わる。中山間地域のリーダー的存在。
 「庁内まちづくり研究会」「空間を元気にする会」に積極的に参加、活動する。
 会の事務局としてテレビ局記者の経験を生かし広報活動に能力を発揮する。
 「情報公開条例」策定の主担当。祭りの山車の大工方として伝統文化の継承に努める。
 「区民ふれあい事業」の企画運営に携わる。自主研究グループで地方分権の調査研究も。
 「横須賀市民協働型まちづくり推進指針」「横須賀市民協働推進条例」策定の中心的存在。
 自治体シンクタンク「小田原市政策総合研究所」の事務局スタッフとして活躍中。
 住民と一体となって、太陽光利用等のクリーンエネルギー利用促進事業に取り組む。
 地域青年団、各種スポーツ活動等、地域に根ざした活動のリーダー的存在。
 「エコタウン事業」に携わり、企業・住民の調整役や集落行事のリーダーとして活躍。
 乳製品加工場の誘致に女性三人で成功。そは打ち教室やそばまつりなどイベントの中心的存在。
 福祉ボランティアとして長年活動。団体のネットワーク化に向け積極的に活躍。
 市の第四次総合計画の策定に携わり、「町づくり委員会」にて積極的に活動。
 「住民参加」「環境・景観」「地域振興」を柱とした木の国ふるさとづくりの会で活動。
 高根村21世紀村づくり塾、事務局として、若手後継者とともに新しい村づくりを实践。
 県青年の船でリーダーとして活躍後、地元消防団で分団長として積極的に活動。
 下山写真クラブ、ワイワイ下山塾、ハンドベルグループに属し、地域づくり活動に従事。
 市役所入所後も、大学で法政策研究を行うなど常に自己啓発に努める。
 住民参画とコミュニティ活動の拠点となる市民センター整備計画に携わる。
 「天の国・木の国・川の国」拠点整備事業に携わり交流人口の増加に尽力。
 イベント・座談会を通じて中心市街地の再生、住民参加のまちづくりの中心的存在。
 中心市街地活性化基本構想策定事業においてワーキング委員として活躍中。
 市町村職員を対象にした「地域づくり勉強塾」の開設につよい意欲をもつ。
 マスカットワイン工房等農産物加工施設の経営分析に取り組み、農業の振興を図る。
 地元のみならずイベントに従事、青年活動や消防団員としても活躍。
 国際色豊かなハレリーフェスティバルに率先してボランティア参加。
 「官民合同研修」の参加者とグループをつくり、「住んでみたいまち、呉」をを目指す。
 県民相談、県民活動を支える県民活動アドバイザーとして活躍。
 地域資源や活性化のアイデアを掘り起こす「元気な中山間づくり支援事業」の中核的存在。
 「コミニエテ」計画推進市民会議において行政と市民の協働作業によるまちづくりを進める。
 「まちづくり委員会」総合計画町民スタッフ会議に携わり住民の生の声をまちづくりに反映。
 所属課において地域活性化に奔走。町主催のアジアフェスティバルにてタイの少数民族と交流。
 まちづくりパトロール隊「まちづくりワークシヨップ」等まちづくり活動に積極的に参加。
 大口市芸術文化協会事務局長としてイベント、文化行事開催の中心的な役割を果たす。

住民参加による 魅力ある 公共施設づくり

住民参加による
公共施設の活性化
調査研究報告書

公共施設は、住民がそこで活発に活動し、地域づくりの核となることが望ましい姿である。一方、多額の整備費用をかけた割には、あまり活発に利用されていないという批判も見受けられる。

今日、地域づくりの幅広い分野において住民参加が進められている中、公共施設についても建設や計画に住民の意見を反映し、また施設の運営、事業の企画立案などのソフト面で住民参加を進めることで、成功している事例が全国に数多くある。

当センターでは、平成十二年五月に、「住民参加による公共施設の活性化に関する調査研究委員会（委員長・森啓北海学園大学法学部教授）」を設置し、全国の取り組み事例をヒアリングやアンケート調査によって収集し、公共施設における住民参加

手法のポイントをまとめた。ここでは、その概要について説明する。

公共施設における 住民参加の現状と課題

●六割の自治体で取り組み

全市区町村を対象にアンケート調査を実施したところ、二千二百五十二自治体から回答があり、そのうちの約六割（千三百十八）の自治体が、何らかの形で公共施設における住民参加に取り組んでいるという回答を得た。

一方、取り組んでいない理由としては、「責任の所在」と「ノウハウの不足」をあげた自治体が多い。公共施設の管理運営に住民が主体となつて取り組む場合、「だれが責任をとるのか」との声は、以前から聞かれているところであるが、今回の調査でも「責任の所在」問題は、根強く残っている結果となった。

全国的 先進的な取り組み

全国の住民参加に取り組んでいる先進的な事例として、下記の公共施設について調査を実施した。住民参加の特徴別に四つに分類して紹介している。

先進事例から学ぶ 住民参加のポイント

住民参加を積極的に進める公共施設では、行政側は試行錯誤が必要と認識し、住民側は専門性と組織体制を確立することに努力している。もちろん、直接参加していない住民や地域社会とのかかわりにも留意している。

本報告書では、公共施設における住民参加の取り組みにあたって留意すべき点を、具体的事例を用いて紹介しながら、「自立的組織の形成を心がける」など十三のポイントとし

てまとめている。これから取り組みとする際には、「最低限必要な条件」として、現在取り組んでいる際には「評価軸」として参考にしたい。ただき、住民によって活発に利用される魅力ある公共施設づくりに役立っていただきたい。

（助地域活性化センター）コンサルタント
業務課副参事 木村恭一

公共施設名※印は、左ページに概要を記載	施設の種類の	住民参加の特徴
金沢市民芸術村※	文化創造練習施設	分類1
町田市子どもセンター※	児童館	利用者が責任を持つ施設
台東リサイクルプラザ※	リサイクル施設	～公募・行政呼びかけ型～
すみだ生涯学習センター	生涯学習施設	
清水市中央公民館	公民館	
鎌倉市市民活動センター	市民活動施設	分類2
富良野演劇工場	劇場	利用者が責任を持つ施設
しいの実シアター（島根県八雲村）	劇場	～パートナーシップ型～
ゆだ文化創造館（岩手県湯田町）	劇場	分類3
滋賀県立琵琶湖博物館	博物館	ファンを育む施設の実現
半田市中学校体育施設	体育館	分類4
高知子どもの図書館	図書館	住民主導のまちづくり

事例1 金沢市民芸術村 —24時間年中無休をディレクター制で実現—

文化創造や練習にかかわる施設では、利用者側から「いつでも好きなときに使いたい」というニーズがあるにもかかわらず、全国のほとんどの施設で実現していない。そのような住民ニーズに対して、金沢市民芸術村では、利用者である住民自身に運営を任せることによって「24時間年中無休」を実現している。

利用者を代表するディレクターを民間人に委嘱する「ディレクター制度」の導入によって、住民による自主運営を図り、利用の自由と自己責任が保たれている。また、利用者の経済的負担を考え、低料金制度も活発な施設利用を促している。

金沢市民芸術村
オープンスペースとドラマ工房



事例2 町田市子どもセンター 「ばあん」—ケガと弁当自分持ち—

公共施設では、こまごまとしたルールがあると、立ち寄りやすく居心地のよい施設にはならない。たとえば「子どもだけでは危険だから」という理由で、必要以上に利用規則を設けてしまい、かえって利用者を遠ざけてしまう施設はないだろうか。

町田市子どもセンターでは、「ケガと弁当自分持ち」を合言葉に、利用者である子どもたちが自らルールを定めて、子ども委員会により自主管理を実現している。

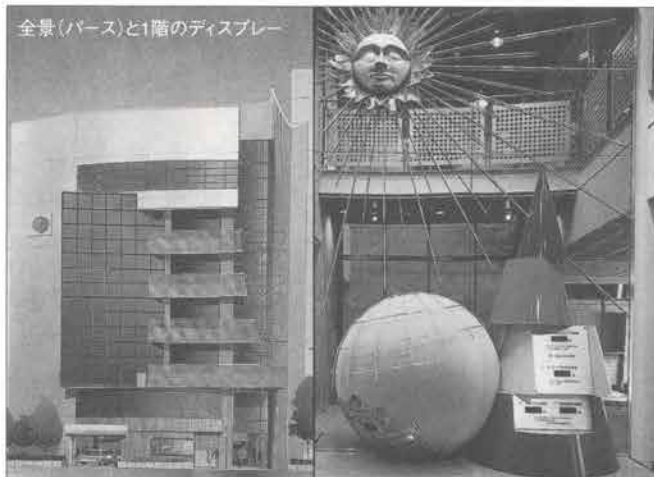


①子供委員会 ②夏祭り・おばけ屋敷 ③夏祭り・地域の人の交流 ④一年感謝祭の準備

事例3 台東リサイクルプラザ「ひまわり」 —市民がリサイクル活動塾を運営—

「そもそも環境問題は、住民意識が育たなければ解決しない」。土地事情によりゴミ処理施設がない台東区では、かねてからゴミの減量化が課題となっていた。そこで、リサイクルを進める施設を設置するにあたり、リサイクル塾を先行して開催することでリサイクルに意識の高い人材を育成し、卒業生による運営主体の形成を呼びかけ、組織をコーディネートしている。行政からの投げかけにより、かかわった住民が主体的、自立的な存在に育ち、行政との協働につながった事例である。

全景（パース）と1階のディスプレイ



地域づくり団体探訪 もつたない総研フォーラム……福岡県北九州市

もつたない、を合言葉に 本当の豊かさを追求 エコタウン掲げ再生紙づくりや塾活動

北九州市は、明治以来、鉄と石炭により日本の重厚産業の中心であった。そして今、循環型社会実現を目標に「エコタウン構想」を掲げ、パートナーシップによるまちづくりを進めている。

民間の財団である財北九州活性化協議会は、かつての鉄鋼公害のまから環境重視のまちづくりにより一九八五年に「全米一住みやすい都市」になった米国ピッツバーグ市の取り組みを参考にして、

青年会議所の呼びかけで、地元企業を中心に設立したまちづくり支援団体である。その設立十周年を記念して地元密着型シンクタンクの設置構想を掲げた。

「シンクタンクより Doタンク」

このシンクタンクⅡ「もつたない総研」の準備期間として「もつたない総研フォーラム」が平成十一年七月に設立された。環境未来都市の実現に向けて、分析中心の「シンクタンク」ではなく、実際に行動する「Doタンク」を目指している。

まずユニークな団体名だが、「もつたない」と言う言葉がもともと持っているモノや自然に対する畏敬の念、戦後の日本の復興期にどこでも見られたものを大切にしようとい

う感覚である「もつたない」をキーワードに、みんなが広場（フォーラム）に意見を持ち寄って、わいがやがやすることによって、将来にわたり生き生きと生活することができるライフスタイルを提案していくこととの思いが込められている。

チーフコーディネーターの野田一明さんと事務局の石井亜由美さんから主な活動を紹介してもらった。

まず、設立間もない同フォーラムをみんなに知ってもらうため、その広報活動は最も力を込めている。「もつたない通信」は、石井さん



を中心として季刊で発行されており、協議会の会員や市内の公共施設に四千部を配布している。これを見てフォーラムの存在を初めて知り、ボランティアに参加してくる人も多いという。クオリティの高いニュースバーバーとして、地域づくり団体全国協議会の主催する「平成十二年度地域づくり誌コンテスト」においても優秀賞を受賞している。



また、塾のあと開かれる交流会でも、リターナブル瓶のラップ飲み、食べ物はサンドイッチや巻きずし、あとは参加者からの差し入れを片手

次に、定期的に講演形式で開催されている「もつたない塾」。この塾活動は志のある人を集めて輪を広げていくというところで、動員を一切かけずに平成十一年九月に開始。現在、企業人から主婦まで多彩な顔ぶれの参加者が毎回約六、七十人集まって、ほぼ毎月開かれている。

「トイレットペーパー研究部会によるリサイクルトイレットペーパー製品化(写真は、ネーミング、ロゴ表彰式と製品)」

に、フリートールキングがメインディスプレイ。もちろん、紙コップや紙皿は使わず、空き瓶は酒屋さんでデポジットの返金を受けるなど徹底している。

●100円当たり1円を寄付

そんな中、注目されているのが、昨年度より始動した「トイレレットペーパー研究会」。産官学民の各セクター参加による循環型社会形成の社会実験として、北九州ブランド・リサイクルトイレレットペーパーを企画・製品化し、この四月から地元のスーパーなどで販売している。



「見たい、知りたい、今の農業調査部会」の活動。グリーン購入フェアでの展示と地元農家での赤米の田植え

もともと、トイレレットペーパーはバージンパルプでつくられていて、環境意識の高まりとともに再生紙の比率が高まったと思われがちだが、実際は、最初はリサイクルペーパー一〇〇％で、香りや色を付けたたり、柔らかくしたり手を加えるうちに年々バージンパルプの割合がアップしてきたものという。

まず、ネーミングを市内小中学校から公募。五百四十三件の応募の中から「北九州紙 えこっパパー」に決まった。出来上がったトイレレットペーパーはリサイクルペーパー一〇〇％使用の無漂白、長さ百三十センチ

芯なしタイプ。飾り気はないが実用的。販売価格が割高になりがちなエコ商品を、モラルだけで買ってもらうのではなく、一般に流通している主力商品と同程度の価格までコストダウンを図り、競争力を持たせることに腐心したという。

また、協議会ではトイレレットペーパー一パック当たり1円を環境教育のため北九州市PTA協議会に寄付することに決めた。この案もインターネット会議にかけて参加者に意見を求めた。今後も、普段フォーラムに足を運んでいただけない方とのコミュニケーションの場として、インターネット会議を継続的に運営していく方針である。

「当初は、今の時代にそんなことできるか、青っぽいね、書生っぽいねとの声もあった。最近になってやつと周囲にも認知されてきたかなと実感している。平成十四年にはフォーラムから正式に『もったいない総研』として活動を続けていく予定であり、今後とも良い活動を積極的に実施し、また支援もしていきたい」と野田さんは語る。

●次はエコレストラン出店

さらに、十三年度は、ユニバーサルデザイン総合研究所の赤池学所長のプロデュースによるエコデザイン研究会を設置。企業との接点をさらに増やすべく、「北九州エコスタンダードの構築」と「エコ産業創出」についての調査研究を行う。

その中で、まず立ち上がったのが、「エコレストラン部会」の活動。七月から開催される「ジャパンエキスポ北九州博覧祭二〇〇一」にも、地元企業・生協と協同で「もったいない総研フォーラム」がプロデュースするエコレストランを出店の予定だ。

「身の回りの小さいところから取り組み、具体的に追求していく。失敗してもいいから、半分くらい決まったら取りかかろう。社会実験、社会実験と言って、とにかくいいと思える試みを先へ先へと進めていこう」と野田さん。今後も、ベクトルボルの再利用やエコ住宅プロジェクトの実現に向けて取り組んでいきたいと語る。

前（助）地域活性化センター研修交流課
副参事 木村隆広

もったいない総研
フォーラム
プロフィール

●設立年 平成十一年四月 ●設立主体 自主的組織 ●運営主体 助北九州活性化協議会
●会員数 百三十八人 ●代表者 小嶋一碩
●事務局 〒八〇二一〇〇八二 北九州市小倉北区古船場町一―三五 助北九州活性化協議会内 〇九三―五四―三三三三

http://www.mottainai.gr.jp

地域に住む人びとの心の国際化を目指して

東海道四〇〇年祭に英語で街道案内

東海道新幹線「こだま」に乗り、東京から約一時間、静岡県三島市を訪れた。

三島市は、人口約十一万人。富士箱根伊豆国立公園の玄関口に当たり、北には富士山を望み、南には伊豆の温泉郷を擁する。富士山に降った雨や雪は地下水となり、三島湧水群として湧き出て市内の池や川となる。三島は「水の都」とも呼ばれ、この名水を利用したウナギも有名である。

今年二〇〇一年が東海道に宿駅が設けられてから四百周年に当たることから、静岡県では「東海道四〇〇年祭」を実施している。この四〇〇年祭は「エントリ―制度」によりみんなが参加する祭りとして行うまちづくりイベントである。

三島市において「街道案内」にエントリ―している、「グローバル文化交流協会」代表の水野幾子さんたちにお話をうかがった。

外国人旅行者に英語でガイドを

取材当日、協会事務局の皆さんは、「バイリンガルガイド養成講座」を開催していた。二月に発行した『バイリンガルガイド Welcome to ふじのくに・静岡県東部と箱根』をテキストにした勉強会である。

このガイドブックは、静岡県東部と箱根地区の七十八カ所の観光名所を日本語と英語で紹介するもので、グローバル文化交流協会のメンバー百五十人が力を合わせて制作した。原稿執筆に日本語・英語それぞれ約三カ

月、まとめと校正に約六カ月と、完成にはほぼ一年を要した力作である。

この「静岡県東部と箱根」編は、昨年三月発行の「三島」編の続編だ。

「外国人をホームステイで受け入れたとき、自分たちのまちを英語できちんと紹介できるガイドが欲しいという要望が会員から出ていました」

「三島」編には一年半、その後休む間もなく一年間で続編を制作した。

「一番苦労したのは最後の詰めです。全体を統一するために、みんなの目で原稿すべてを校正しました」

「三島編が終わったら少しゆっくりにできるかとも思っていました、全然そんな余裕はありませんでした」

「でも、資料集めや取材・執筆・写真撮影と、会員のみなさんの協力が

あったからこそ、頑張り通すことができました」とみんなで振り返る。

ガイド養成講座は、東海道四〇〇年祭の「街道案内」に向けて、三島編・静岡県東部と箱根編をそれぞれ二回開催、計二百人が受講した。

英会話を学ぶ主婦が集合

グローバル文化交流協会の設立は昭和六十一年四月にさかのぼる。

「最初は民間の英会話教室と一緒に学んでいた仲間が自然とグループになりました。静岡県の西部、中部に比べて、東部は女性グループ活動が活発ではありませんでしたので、何



刊行物を手にする交流協会のメンバー
(中央が代表の水野幾子さん)



世界の医科学者の研修会で、三島市内をガイド

「かやろうということになりました」
「自分たちの学んだ英語力を使って何かをやりたいと思っているときに英会話の先生の、まだまだ日本と諸外国との文化の交流は足りないというお話がきっかけになりました」

三島には日本大学や国立遺伝学研究所などがあり、外国人も比較的多かったことから、地域に住む人びとの心の国際化を目指し、「グローバル

ル文化交流協会」として活動を開始した。

地球の広い視野に立った活動

地球の広い視野に立つて、国や民族、宗教、年齢などのあらゆる壁を越え、地域に根ざしたさまざまな活動を通して相互理解を深め、地球人として成長することを目指す」と設立趣旨にあるとおり、常にグローバルな視点で活動を続けている。

主な活動は、諸外国との文化交流活動、機関誌「DOORドア」と月報「ギア・メール」の発行、外国人へのサポート（ホームステイの受け入れ、日本語教室など）、英会話教室やスペイン語会話教室、クッキングサロンなどの研修活動などがある。

お茶や琴など日本の伝統文化の紹介にも取り組んでいる。「文化交流というのは、まず自国の文化を理解することが大切ですね。日本はどうなのとたずねられて、はたと気づくことも多いんですよ」

活動が盛んになるにつれて、他団体との交流も増え、活動が多方面に広がっている。

る。会員それぞれが忙しくなってきた、時間のやりくりが大変だそうだが。「みんなこの協会だけでなく、いろいろな団体に所属して活動しているの、全員が集まる機会がなかなか持てないのが最大の悩みです」

「買い物袋や箸の持ち歩き運動など、早くから環境問題に取り組んでいました。台所から送る世界へのメッセージとの願いが込められています」

発行物も先のバイリンガルガイドブックに加え、「バイリンガル環境かるた」や「グローバル草紙」と特色あるものを制作している。「バイリンガル環境かるた」は、環境をテーマにしたところの良い標語を日本語と英語で併記したかるた。

「十五年がたちましたが、そのときそのときが一番楽しかったです。夢中になってやってこられたことがいちばんの財産です」と振り返る。

「いろいろなことをやるのが自分たちの勉強になるということ。そこにはお金に代えられない何かがある。それが私たちの力の源です」と語るみなさんのさわやかな笑顔を思い出しながら、清流沿いを帰途に着いた。



前助地域活性化センター企画調査課 副参事 高橋康志

OPICS 地域通貨「エンバサ」で商店街活性化事業

高知市中心街で実験、平均1.2回流通

高知商工会議所中小企業相談所
今城逸雄

高知市では、近年、整備された市街地を開く環状道路に沿って、大規模店の出店が相次ぎ、既存の商店街の地盤沈下に拍車がかかっている。昨年末には、そこに四国最大規模のショッピングセンターがオープンした。

このような中、高知商工会議所では、これまでさまざまな商店街活性化のための事業を展開してきた。その一つに平成七年から四年間放送したCATVでの商店街情報番組がある。

これは情報発信機会の少ない近隣周辺の八つの商店街から集まった若手の世話役により構成されたプロジェクトチームが、番組を企画し、自ら出演するというもので、ユニークな番組づくりが視聴者にたいへん好評であった。

情報番組終了後も、新しい事業に結びつけようと毎月勉強会を継続し、深夜まで議論が交わされることもある。その議論の中から出てきたのが、これからの商店街は単なる買い物場ではなく、コミュニティの

核となっていかなければならないという考えである。

そのための仕掛けの一つとして地域通貨に注目し、一昨年からエコ活動に熱心な中心商店街の一組が加わり、研究をしている。

50日・米・欧で
以上の地域通貨

地域通貨とは、特定の地域やグループの中での物やサービスのやりとりを利用されるもので、円などの通貨とは交換ができない。

欧米では九〇年以降導入する地域が増え、代表的なものに英国、豪州などに広がっている「LETS」米国で流通する「タイムダラー」といったものがある。日本でも二年ほど前から動きが活発化し、北海道栗山町の「クリン」、滋賀県草津市の「おうみ」、千葉市の「ビーナッツ」など、現在では五十以上の地域通貨が流通しているといわれている。

仕組みは大きく分けて、物やサービスをやり取りするたびに増減を通帳に記入していく「記帳方式」と、

独自の貨幣を作製し流通させる「貨幣方式」がある。どの地域通貨も目的は、地域やグループの関係づくりや、活動の促進を目的としている。今回、地域通貨の実験事業を行った菜園場商店街振興組合の福島紀子理事長も、先のプロジェクトチームの一員である。

菜園場商店街は高知市中心のはりまや橋から東に徒歩で約五分、南北約百メートル、五十店舗ほどが連なる。昔ながらの手作りの味を伝える食料品店が多く、高知市の東の台所として親しまれてきた。

しかし中心部にありながら、アーケードやアーチ、店舗は昭和三十年代から姿をほとんど変えておらず、客の減少も著しい。

そこで昨年二月から、当所がコーディネーター役となり活性化に向けた検討会を始めた。

商店街の
割引券発行がきっかけ

第一弾の事業は五月に、隣接する保育園の親子の協力により実施した

アーケードの支柱を飾るフラワーボット作りであった。

このときお礼として、全店一〇％の割引券を発行。これが地域通貨に発展していく。



月	日	お名前	月	日	お名前
月	日	お名前	月	日	お名前
月	日	お名前	月	日	お名前
月	日	お名前	月	日	お名前
月	日	お名前	月	日	お名前
月	日	お名前	月	日	お名前

プロジェクトチームで研究をしていく中で問題となったことは、地域通貨は、ボランティア活動の中であれば現実の経済活動と離れたところで流通させることができるが、商店

100エンバサ貨。裏面には利用の日付と名前を記入

(実寸法の2分の1)



エンバサと商品との交換(合言葉はピバツ)



小学生による商店街のフラワーポット作り

街では記帳や課税などといった問題が出てくることである。当時はほかの事例も少なく、具体的活動のイメージがつかみにくかった。

しかし、このお札としての割引券の感覚が地域通貨になるのではないかと考え、菜園場商店街がそのさきがけとして地域通貨の発行実験に踏み切った。名前は菜園場をもじった「エンバサ」。これは福島理事長が、以前女子高生が菜園場をエンバサと呼んでいたことを、いつか使おうと考えていたものである。

紙幣は百エンバサのみで、エンバサ事業に賛同し登録した方に、「チラシ配り百枚千エンバサ」「花の水遣り百エンバサ」など店側の希望と、「焼鳥一本百エンバサ」「全商品一

〇%引き百エンバサ」などのエンバサによって提供できる事項が書かれたリストが渡される。コミュニケーションのきつかけとなるように、エンバサをやり取りする際は必ず「ピバツ！」と言うことをルールに加えた。

菜園場商店街は高知最大の夏のイベントである「よさこい鳴子踊り」の競演場の一つで、踊り子隊も出しており、八月の祭りの時期は多忙を極める。そのため最初の発行は、よさこい祭り運営を手伝ってくれた方へと決まった。

その後、近くの公園の清掃やフラワーポットの植え替え、活性化策検討のためのワークショップなど、商店街事業に参加してくれた方に発行

し、各店で利用されるようになった。エンバサが話題になるにつれ、もっと気軽に使ってみたいという声が聞かれるようになり、十二月十七日には「エンバサまつり」を実施。ゲームや高知福祉専門学校による手話教室などへの参加者にエンバサを発行し、模擬店などでも使えるようにした。

一部の店に 利用集中

実験事業は十二月末で終了した。回収した紙幣を見てみると、最多で五回、平均流通回数は一・二回。利用も商品と交換できる一部の店に集中する傾向があり、客の希望と店のほうの要望が必ずしも合致しないことがあり、流通を円滑にするシステムへの改善が必要である。

ただ高知短期大学が菜園場商店街を研究テーマに取り上げ、アンケート調査や検討会に参加してくれたことなど、エンバサを通して、近隣の学校や住民などとの交流が始まった。

菜園場商店街では現在アーケード建て替えの検討を進めており、エンバサの再スタートの準備が整い次第、まちづくりに関心のある市民団体などにも参加を呼びかける意向である。

西隣のはりまや橋商店街でも、昨

年から始まった高知商業高校との関係を、より深めるために地域通貨の導入を考えている。

一方、プロジェクトチームはコミユニティビジネスへも研究を広げようとしている。

まだまだ課題も多く、未知数な地

●エンバサリストの例※お店から提供⇔お店が欲しいこと

- <内藤かまぼこ店>
- てんぷら1枚(100エンバサ)⇔看板の掃除(1500エンバサ)
- <ファッションプラザ共栄>
- 全商品10%引き(100エンバサ)⇔駐車場の掃除(500エンバサ)
- <さえんばニュー山重>
- 焼肉のたれ(小)(300エンバサ)⇔チラシ配り10枚(100エンバサ)
- <大国屋金物店>
- おすすめ灰皿(200エンバサ)⇔日曜日の花の水やり(100エンバサ)
- <セイ美容室>
- 全サービス10%引き(100エンバサ)⇔本の整理(100エンバサ)
- <大和店>
- 100円の漬物1つ(100エンバサ)⇔店の掃除(200エンバサ)

域通貨ではあるが、その活動がきっかけとなり、市民パワーの活動の場、交流の場が商店街において創出され、新たな事業の展開が生まれれば、大規模店とは違った、これまでにない魅力あるまちづくりが可能になるのではないだろうか。

センタースタッフ 通信

熊本県の小国町が
九州ツーリズム大学21の
受講生を募集

九州ツーリズム大学は九月からは、実践課程として「地域づくりツーリズム学科」と「習農学科」を開講する。同大学は平成九年九月熊本県小国町に開校した、わが国ではじめてのツーリズムの人材養成機関。四年の間に五百人に及ぶ卒業生・修了生が生まれ、彼らの多くは九州のみならず、全国各地でツーリズムを担う人材としてさまざまな分野で活動・活躍しており、本年度は、五月から教養課程が開校されている。

これからの地域振興は、美しい自然環境の保全と地域内資源の健全な活用が求められており、新しい交流ビジネス、交流文化は地域に活力を甦ら

せる起爆剤となると期待されている。

●お問い合わせ先 九州ツーリズム大学事務局 宮崎
☎〇九六七・四六・五五六〇
☎〇九六七・四六・五六九五
E-mail: JDF05440@nifty.ne.jp

首長来訪

▼5月4日 福岡県八女市
野田国義市長

▼5月17日 長野県上山田町
小山立町長

▼5月30日 岡山県落合町
辻麒一郎町長

笑顔がいちばん! 放送予定

●7月8日
徳島県鴨島町、井川町
空海をたどる道

●7月15日
石川県小松市、山中町
勧進帳の故郷

●7月22日
沖縄県宮古島市町村圏
世界初の地下ダム巡り

●7月29日
奈良県吉野地域
魅惑の奈良吉野

TBS系 毎週日曜日
午前7時～午前7時30分
※一部で放送日時が異なる地域があります。

第15回 地域イベント実務研修会 参加者募集!!

「財地域活性化センターでは、「地域イベント実務研修会」を本年も開催します。実務にすぐ役立つ知識が得られると毎年好評をいただいています。奮ってご参加ください。



昨年の研修会風景

●企画入門コース 9月5日(水)～7日(金)

講師:二瓶長記先生(イベントクリエイター)

*地域イベントに初めて携わる方が、基礎からイベントを理解できる。

●実践応用コース 9月26日(水)～28日(金)

講師:新藤健一郎先生(地域振興コンサルタント)

*「あなたのまちのイベントはマンネリ化していませんか?」のテーマで、具体的な事例に即して、これからのイベントのあり方について考える。

<会場>東京弥生会館(東京都文京区) <費用>各コース 30,000円

<募集人員>各コース40人 <申込期限>8月6日(月)

*申込者多数の場合は、書類選考のうえ決定します。

●問い合わせ先=(財)地域活性化センター

業務第1課 ☎03-5202-6136 担当:宮本・村杉

「財地域活性化センターでは、ホームページ「地域づくり百科」(<http://www.chiki-dukuri-hyakka.or.jp>)において、イベントと地域産品の情報を公開してきましたが、より多くの利用者に向け、一層魅力のある充実した地域情報を提供するため、これまでの情報に「おすすめスポット情報」を加え、地域の情報を総合的に提供できる新しいホームページ「地域ホッと!サイト」を開設しました。

このホームページでは、地域から全国に向け発信される魅力ある情報を豊富に集約し、随時最新の情報を追加・更新していくため、いつでも新鮮な情報が入手できます。

また、利用者の「使いやすさ」を何よりも重視し、初心者の方でも、楽しみながら簡単に情報を得られるようデザインや機能を工夫しました。地図上でクリックするだけでその地域の情報が得られる「全国マップ検索」を備えています。

地域と全国の利用者を直接繋ぐ架け橋となることを目指します。ご活用ください。

インターネットホームページ
「地域ホッと!
サイト」オープン!!

<http://www2.chiki-dukuri-hyakka.or.jp/guide/>

●問い合わせ先=(財)地域活性化センター
業務第1課 ☎03-5202-6136 担当:飯田、村杉



手前みそ
ですが…

③ 福井県大野市

全国の

大野さん集まれ

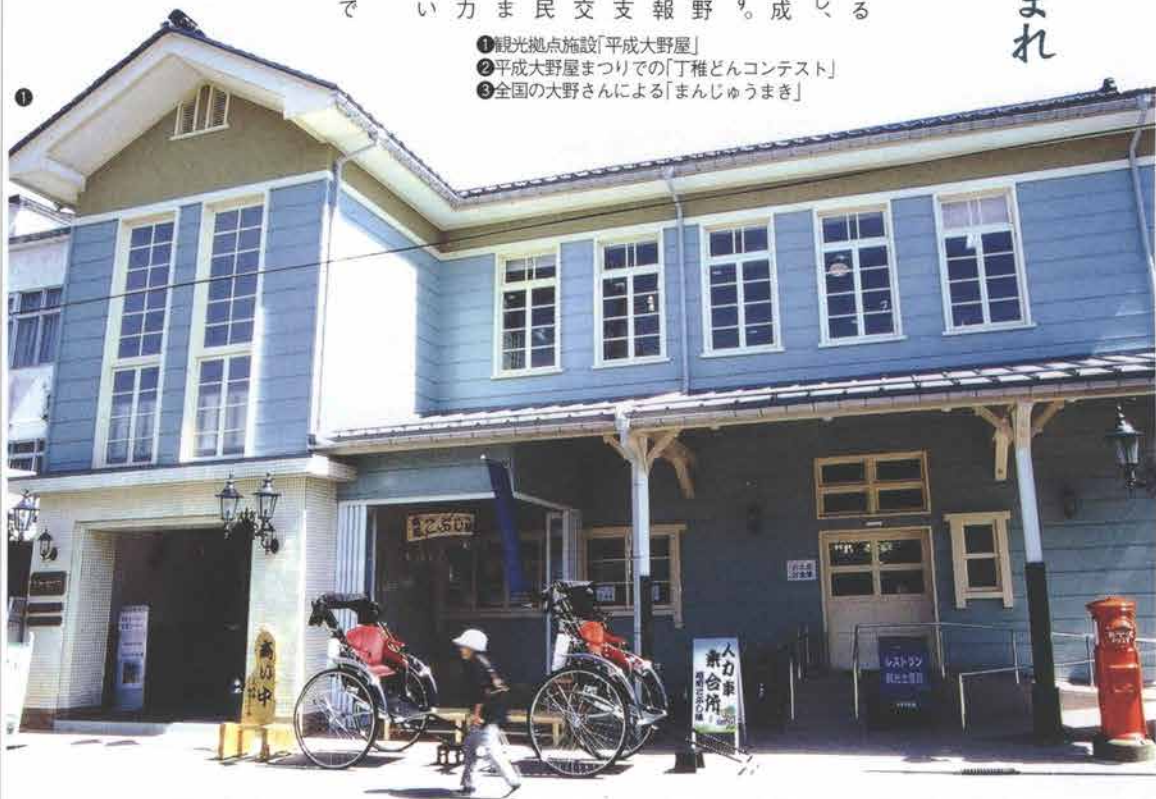
藩の史実習い 観光拠点施設も整備

大野市では、幕末期の大野藩が藩直営による特産品チェーン店「大野屋」を全国に展開し、藩の財政危機を救ったという史実に習い、平成八年より「平成大野屋事業」を展開しています。本事業は、市と同じ名前を持つ全国の「大野さん」を平成大野屋支店主として委嘱し、情報の受発信や市民との交流を実施しています。支店主と市民が、観光やスポーツなどを通じて交流することにより、まちがにぎわい、地域住民も支店主から刺激を受け、元気になるいます。また、自分たちのまちの優れた資源や環境の魅力を再発見し、誇りを持ってまちづくりをしようとする意識高揚につながっています。

平成十一年には、観光客や市民同士が交流できる場の提供として、観光拠点施設「平成大野屋」を整備し、それと同時に民間のノウハウを交流事業に活用しようと第三セクター「株平成大野屋」が設立され、本事業の支援をしています。

今後大野市では、継続的な交流を実現するため、行政と民間が協力し事業を展開していきます。

- ①観光拠点施設「平成大野屋」
- ②平成大野屋まつりでの「丁稚どんコンテスト」
- ③全国の「大野さん」による「まんじゅうまき」



E V E N T C O R N E R

7月のイベント予定

★日本橋プラザビル
イベントスペース

7月5日
山口県

7月6日
沼田市 (群馬県)

7月9日～10日
静岡県

7月24日～25日
女川町 (宮城県)

★ふるさと情報プラザ
イベントスペース

7月2日～6日
神戸市 (兵庫県)

7月9日～13日
盛岡市 (岩手県)

7月23日～26日
山口県



5月実施イベント

★日本橋プラザビル
イベントスペース

5月9日
吉川市 (埼玉県)
吉川物産キャンペーン①

5月15日～16日
姫路市 (兵庫県)
姫路うまいもんふるさと祭り

5月18日
大和郡山市 (奈良県)
第7回全国金魚すくい選手権大会PR活動②

5月25日
西脇市 (兵庫県)
全国へそのまちな観光物産フェア

5月28日～29日
笠利町 (鹿児島県)
奄美・道の島ふれあいキャンペーン

★ふるさと情報プラザ
イベントスペース

5月14日
五所川原市 (青森県)
首都圏立佞武多PRキャラバン

5月15日～18日
宮崎県
宮崎の観光と物産展③

5月28日～6月1日
北九州市 (福岡県)
行ってみね、北九州市～北九州博覧祭&北九州市の観光展

編集後記

▼今回のテーマ「ミステリーのまち」は、遊び心によるまちおこしの事例でもある。その地にしかない素材、伝説などを掘り下げ、生かしているのが共通した特徴であった。歴史のうえからは、荒唐無稽と思われる弁慶伝説なども、読み進むうち一瞬、事実だったという気さえしてくるから不思議だ。また、征服者側から鬼にさせられた温羅は実在していたと思われてくる。一概に否定できないものがあるからこそ、代々伝説として語り継がれてきたのだと思う。カネをかけなくても、チエとアイデア一つで、まちおこしができることを、これらの事例が示していると言えそうだ。

▼今回、ある自治体に補足取材していて残念なことがあった。その「売り物」である事例について質問したところ、実に不親切。まちづくりは人づくりといわれるが、まず、対外窓口であり、自治体の顔、声である広報マンを育成してほしいとの思いを強くした。

▼今月号から編集を担当することになりました。時代を先取りするようなまちづくりの事例、土の香りがするような事例を今後、紹介していくつもりです。(丘)

●8月号予告
特集Ⅱ 日本の中の外国

地域づくり7月号

平成13年7月1日発行 編集・発行＝財団法人地域活性化センター
東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131(代) <http://www.chuki-dukuri-hyakka.or.jp/>

印刷＝大日本印刷株式会社

[illegible]

2001年市町村振興宝くじ

3億月

1等・前後賞合わせ3億円

2等だつて

1. 價

7/16月 発売 8/13日 組

発売期間 7/16(火) ~ 8/14(火)
抽せん日 8/14(火)



財団法人全国市町村振興協会／全国市長会／全国町村会／全国市議会議員会／全国町村議会議員会